



325
308



始



325-308

兒童說教



吉田源次郎著

大正
7. 8. 10
内交



序

二十世紀の最大問題は兒童であります。此問題を適當に解決して、我々は人類の運命に關する最重要なる問題の一つを解決するのであります。

キリストは二千年の昔「嬰孩を我に來らせよ」と喝破せられました。我々は我々を圍繞する兒群をキリストに紹介する爲に、これ程苦心し、これ程考慮し、これ程祈つて居るであらうか。殊に、神に仕ふる最善の時期に際會して所謂 Teen Age (十三歳以上) の兒童の宗教教育、信仰振興に就いてこれ程の努力を費して居るでありませうか。「汝の少き日に鞭(神の訓誡)を負ふは善し」(哀歌三章二十七節)「子をその道に従ひて教へよ、然らば老いたる時も之を離れじ」(箴言二十二章六節)と云つてある「少き日」とは特に、英雄憧憬時代 (Age of Chivalry) 社會心湧興時代 (Age of Civic Awakening) を指したもので

あります。此時代が神に結び付き、神と信仰的關係に入る最善の時期であるとの意味であります。然らば如何したら、兒童をして生涯の最善い部分を神に獻げしむるに至るか、之れ大問題であります。其一つの道として編者は同時代の兒童のみの禮拜を營む事を推奨したい。此兒童禮拜については近來我國でもチラホラ呼聲が高くなつて來たやうであるが、誠に喜ばしい現象であります。

そこで、問題になるのは、然らば兒童に何を如何に語るべきかと云ふ事であります。編者は嘗て二三の兒童禮拜に列席したことがあります。そこでは、お伽噺式のもの、或は大人にでも分らな煩瑣な題目が兒童説教として語られて居りました。で編者の思つた事は、何とかして適當な兒童説教の材料を得たいと云ふ事であつた。處へ丁度、數種の参考書が手に入つたので、早速此書物の編述を始めた次第であります。今日、英米に於ける此方面に關する書冊の出版は實に素破らしいものでありまして、それこそ汗牛充棟と云ふ古い形容詞では間

に合はぬ位であります。

我國に於ては「日曜物語」「御伽草紙」「バイブル御伽噺」等は別として、説教の名の冠せられたものは H. T. Kerr 氏の Children's Story Sermons を譯した「お伽説教」の外一冊も出版せられて居ません。

兒童禮拜に關して相當に云爲される今日、兒童説教に關する著作が殆ど無いとは頗る心細い次第であります。此書は敢て其欠陥を補ふ爲であるとは豪語致しませんが、若し此が我國に於ける此方面に關する書冊出版の野に呼べる粗大な叫となる事が出來たならば勿怪の幸と思ふのであります。

唯神によりて、多少なりとも此書冊が我國に用ゐられ、信仰振興期にある若き兄弟姉妹の一人をなりとも天父に導く助けとなり得るやうにと、ひたすらに祈りつゝ編者は世に送り出す次第であります。

此書冊は單に兒童禮拜の爲ばかりでなく、王女會共勵會等の講話資料として

又日曜學校上級生の讀物として、一般信者の信仰修養の助けとして、多少役立つだらうと思ひます。

編者は此書編述の上に、多大の暗示と材料とを供して呉れた、「The Soul of A Child」の著者 Rev. Stuart Iye Hutchison 及び「What I Said to the Children」の著者 Rev. R. C. Gilie に最善の好意を表します。

又此書の編述を激勵し、萬障を排して世に出して下さつた畏友西阪日曜世界社主筆に滿腔の感謝を表します。

一九一七年十一月十一日聖日夜

東京の郊外近き僑居にて

編者識

編者は、此書冊の内容を、可成だけ價值のあるものにしたと思つて、相當苦心と努力とを盡しました。増補に増補を加へたため一年五十二回の日曜の半分の數二十六編だけ一先纏めやうと考へてゐたのが、案外に三十五編の説教を世に送り出すべく餘義なくされました。

此書物の標題についても、少なからず苦勞したのであります。短篇説教とあるのには、比較的六ヶ墩のが集めてあるつもりであります。それで、實は、全体の内容から考察して、一層のこと、「青年への説教」と名付けやうかとも考へてみました。

然し、學術的に云へば、児童と云つても、小學校通ひの方々のみを意味するのではないから、矢張、元のまゝ、我國では多分始ての書物の標題である「兒

童説教」と云ふ名稱で、諸君の机邊を訪れることに致しました。

編者は、此書冊が所謂 Teen Age の方々、及び殊に、男女の青年諸君の讀物として、相當の價值のあることを疑ひません。

編者はまた、Stuart Robertson 氏著短篇兒童説教集 The Rope of Hair から貴重な構想と、話材とを澤山與へられたことを、厚く感謝いたして居ります。

一九一八年四月最終の夜伏見の寓居にて誌す

兒童説教目次

一	靈魂の晴衣……………	一
二	父が機關手……………	二
三	聖書の算術……………	七
	短篇説教(1)何時だらう?……………	三
四	聖書のゴドモヘーチ……………	二六
五	神の武器……………	四
六	誠を帯とすべし……………	三
	短篇説教(2)髪の小……………	四
七	義の護胸……………	四

八 平和の鞋……………五〇

九 信仰の盾……………五三

 短篇説教(3) 夜の歌……………五七

一〇 救の冑……………六一

一一 聖靈の劔……………六四

一二 復活 (イースター禮拜の爲)……………六九

 短篇説教(4) アーメンハレルヤ……………七六

一三 舌の力……………八〇

一四 ランプ物語……………八五

一五 童兒の聲を聴き給ふ神……………九〇

 短篇説教(5) 隠れたる奉公……………九七

一六 何を祈るべき乎……………一〇三

一七 應答なき祈……………一〇九

一八 何故動物を愛護すべき乎……………一一五

 短篇説教(6) 星辰と慧星……………一二二

一九 敵を愛せよ……………一二五

二〇 汝等の光を輝かせ……………一三三

二一 否の一語……………一三七

 短篇説教(7) 翻譯のできない聖語……………一四二

二二 神は何故惡魔を殺し給はない乎……………一四八

二三 イエスの少年時代……………一五五

二四 孝行訓 (親孝行デーの爲)……………一六四

二五 流矢に射殺されし王の話……………一六八

二六 フォルゲット・ミー・ナット物語(花の日の爲)……………一七五

二七 聖書の文法……………二八一
 二八 鈎と餌……………二八八

目次終

靈魂の晴衣

天国は如に藏れたる寶の如し、人見出さば之を秘し、喜び歸り、其所有を盡く賣りて、その畑を買ふなり。馬太傳第十二章四十四節



聖書は一つの「寶の筐」でありまして、其中には雑多の寶が藏されてゐます。また聖書を筆筒に譬へる事が出来ます。舊約と云ふ三十九桿の古筆筒と、新約と云ふ二十七桿の新筆筒には、例令全世界を以てしても買ひ集める事の出来ない種々の美しい立派な着物や、皆様の吃驚なざるやうな珍しい品々がしまはれてあります。

アダム、エバの無花果樹の葉衣、ヨセフの紅い着物、バプテスマのヨハネの駱駝の毛衣などは、何處の博物館へ行つても決して見られない着物ではありませんか。

然し聖書箴言の中には、此等に優る大切な貴い着物がしまはれてあります。それは肉體に著ける着物ではありません。神様の前に出る時、是非共著けておなければならぬ靈魂の着物であります。今からそれを一つ一つお目にかけてやうと思ひます。

先、以賽亞書第五十九章十七節の抽出を開けて見ませう。これは舊約聖書の方ですから、少し外見は古箴言のやうに見えますが、中味は永遠も朽ちない立派な着物で充滿になつてゐます。此處にある燃立つやうな紅い着物——これは熱心と云ふ外服であります。

「エホバ熱心を着て外服となしたまへり」とあります。熱心を着た人とは如何なる人を云ふのでせうか。熱心とは眞面目であります。物事に熱中する事であり、何か善事を爲さうとして燃立つ事であり、親の命令に直様返答と共に立上つて用事をする子供、イエス様の御用とあらば、何事を差措いても骨折

る日曜學校の生徒、斷らず何か他人を益し、世の中を善くする爲に盡さうと心懸けてゐる人々、親、兄弟、親戚、朋友さては近所隣の人々の救はれるやうにと、人知れざる處で涙を流して祈つてゐる方々、此等は皆熱心を外服として着た人々であります。

次は彼得前書第五節と云ふ抽出を抜いてみませう。此處にある着物は一寸見には何だか餘り目立たぬ色合ですが、十字架の光に照らしますと、眞珠のやうに光り輝きます。これは謙遜と云ふ着物であります。

「互に皆相服ひて謙遜を衣よ」とあります。自分を人の前に豪く見せやうとか見せびらかすとか云ふ考の少しも無い少女があるとし、其少女の靈魂の着物は謙遜であります。「キリストイエスの意を以て意とすべし」(腓立比書第二章五節)とパウロは勧めて居りますが、キリストの意とは謙遜る事であり、謙遜つた心を以て互に他人を自分に愈れりとし、自分の事ばかりを顧みないで

他人の事をも顧る心であります。恁那着物を着てゐる人々が一人でも殖れば殖ゆる程、それだけ世の中は住心地よく、氣持よくなるのであります。謙遜と云ふ着物は一見、見すばらしく見ゆるかも知れませんが、神様の前では、これは最も美しい晴衣なのであります。

次の抽出は哥羅西書第三章十二節であります。

「爾曹神に選ばれて聖潔かつ愛せらるる者となりたれば、慈悲、矜恤、謙遜、柔和、忍耐を衣よ」即ち此處には、五枚の着物が疊み重ねてあります。慈悲と矜恤とは似寄つた柄柄で、柔和と忍耐とは殆んど同じ色合であります。

皆様に逢ふ程の人が、皆様に接する毎に冷れた心が温められ、淋しい心地が慰められるとするならば、皆様の靈魂が、慈悲と矜恤の着物を著けてゐる証據であります。軽々しく怒らない、苦しい辛い事が降りかゝつても、神様の聖業の爲にヂット辛抱して、大抵の事は笑つて通す人があれば其人は柔和と忍耐

を着物とした人であります。

「善をなし苦しめられて此を忍ば、神に嘉稱を得べし」(彼得前書第二章二十節)と云つてあります。他人から晒はれても嘲られても、正直一途に神様を信じ、キリスト様を手本として進み行く人々の名譽は何を以ても比較する事が出来ません。

羅馬書第十三章十四節の抽出を開きますと、班點の一つも無い、神々しい程白い着物が出て参ります。此着物は罪に少しも汚されてゐません。どれ程上手な機械工も此着物だけは手製で作れません。熱心、謙遜、柔和等の着物は、或程度までは人間の手で織り出されなくても限りませんが、此着物だけは神様から戴くより外に道がありません。「惟爾曹主イエスキリストを衣よ」此着物の名は即ち主イエスキリストであります。天國へ着て行かねばならぬのは此着物であります。

「婦は潔くして光ある細き布を着る事を許さる、此細き布は聖徒の義なり」(黙

示録第十九章八節) とある「光ある細き布」とは此着物の事でありませぬ。イエス様の花嫁となるには、ルビーやダイヤや、眞珠を縷めた着物を着たとて何の役にも立ちませぬ。

「イエスキリストを衣る」ことでもあります。全世界で、イエスキリスト様だけが、私達を一切の罪から、全く救ひ出し給ふ力のある救主であります。

或時、疲れ切つて、泥塗れになつた幼きな子供が、俄雨に降り立てられて、ビシヨビシヨになつた泥路に行き惱んでおりました。處へ通りかゝつたのが。親切さうな何處かの小母さんでした。

「まあ、可哀相に、さあこちらへいらつしやい」

小母さんは、子供の方へ腕を差し出しました。子供は直様飛んで行つて其温かい雨衣の中へ入れてもらひました。雨はますます激しくなつて参りました。子供は外套を着けておませんでした。けれども親切な小母さんの温かい雨衣の中

へ纏まつておますので、もう濡れもしなければ、寒くもありません。けれども若し此時、子供が小母さんの歩調に合はせて歩かなかつたならばどうでせう。小供はまた前と同じやうに、苦しい寒い思をせねばなりません。ですから小母さんの雨衣の中へ入れてもらった子供は、何處までも、小母さんと歩調を合せて歩かなければなりません。然し何處までも親切な小母さんは、わざと小刻に、子供の歩調に合はせて歩いて下さいましたので、子供は幸でありました。

斯様に、イエス様は常に、義の衣を私達に差出してゐて下さいます。私達はイエス様の御心を信じて、進んでイエス様にお托せ申さなければなりません。

さうでなければ、何時までも、罪惡と汚濁の暴風雨の中に行き惱まなければなりません。またイエス様にお托せ申した上は、何處までもイエス様と歩調を揃へて、其聖旨を行ふやうにせなければなりません。さうでなければ皆様は、い

つ迄経つても、罪と罰との暴風雨の中で、行き惱み乍ら慄わてゐなければなりまん。イエス様の聖旨は一切私達の爲に善であります。加之、イエス様は、私達に向つては、私達が充分隨いて行けるやうに御自分の方から、わざわざ歩調を合せて下さいます。

今一つ大切な着物があります。それは哥林多後書第五章二節にしまつてある珍らしい名の着物であります。

昔ヨアと云ふ人は、自分の十人の息子息女を一度に失した時に、身を切らるゝやうに悲しみながら、それでも「我裸にて母の胎を出でたり、又裸にて彼處に歸らん、エホバ與へエホバ取り給ふなり、エホバの聖名は讃むべき哉」(約百記第二章二十二節)と云つて、神様に向つて泣事を云はなかつたと云ふ話であります。私達の肉體に屬した着物は兎も角として、神様が此世から、私達を召し給ふ時に、若し私達の靈魂に著ける着物が無かつたとしたなら、どんなに悲しい事であ

ありませうか。

處が茲に私達の肉體と云ふ着物が腐つて壞れてしまふ時、今度は、永遠も朽ち去らない永生と云ふ着物が天に備へてあるのであります。パウロは此事を「我儕これを知る、われらが地にある幕屋もし壞れなば、神の賜ふ所の屋天にあり、手にて造らざる窮く保つところの屋なり、我儕此幕屋に居りて歎き、天より賜ふ我儕が屋を衣の如く着ん事を深く欲へり」と申しました。地にある幕屋とは？私達の肉體のこと。私達が此不完全な肉體、破れやすい地にある幕屋に住んでゐる間は、何時になつても、心配事や、苦しみのなくなる時はありません。けれども神様が、其最も善いと考へ給ふ時機に私達を御許に呼び出し給ふ時、其時には、一切の悲み、歎き、痛悲、涙は拭ひ去られるのであります。

聖書と云ふ二桿の箆筒の中には、恁那に貴重な美しい着物が澤山しまはれて

あります。而して畑の寶の筐と同様に、人々の來つて取出すのを待つて居ります。皆様は此中の一枚でも、皆様の靈魂に著けてゐますか。熱心、謙遜、慈悲、矜恤、柔和、忍耐、イエスキリスト。天より賜ふ屋——どうぞ何よりも大切な此靈魂の着物の目録と、其貴とさをよく心に憶わて下さい。

父が機關手

それ我は世の終末まで常に爾曹と偕に在るなり 馬太傳第二十八章第二十節

或日、私は旅をするため汽車に乗りました。丁度其時私の掛けてゐた前の腰掛は空いてゐましたが、間もなく七歳ばかりの一人の男の兒が乗込んで其處に腰を掛けました。見送りに來た其兒のお母様は、唯一人で恁那幼々な子供を旅に出すのを心配して居る様子でありましたが、發車時刻の迫つた時

「さよなら」

と、云つて、お母様は窓際から離れました。お母様の顔は如何にも悲しさうに見えてゐましたが、其子供は案外平氣でありました。そして斷えず窓の外を覗いては、誰かの來るのを待つ様子でありました。お母様は最早歸つてしまはれ

たのに、一體誰が来るのだらうと、私も其方を眺めてゐますと、今列車が動き出すと云ふ間に、一人の仕事服を着けた男の人が、窓の外から子供を覗き込んで莞爾と笑ひました。子供はそれを見て大層満足した様子でありました。これは屹度、あの小供のお父様なのだらう、而して僅な時間の隙を見て、務先からでも見送りに来たのだらうと思ひました。其人はほんの暫時立つてゐて直に何處かへ急いで行つてしまひました。でも、子供は何も氣に懸ける様子が無く、矢張り平氣でゐるのであります。

さて、いよ／＼汽車は動き出しました。暫時すると私の可愛い道伴の子供は繪本を出して眺めたり、小さい紙箱からキャラメルを出して喰べたり、退屈さうにして居りました。それだと云つて、少しも淋しさうにはしてゐませんでした。次の驛に著くと子供は、また窓から首を出して熱心に誰かを探し始めました。屹度誰かが出迎へに來てゐるのだらうと私は思ひました。友達だらうか

それとも叔母さんだらうか。

處がさうではなかつたのです。丁度再發車しやうとする間に、先刻の仕事服を着けた同じ人がやつて來て窓をコツコツと叩いて莞爾とほ／＼笑ひました。私は子供のお父様が此處まで、此汽車で來たが、いよ／＼「さよなら」をしたに來のだらうと考へました。汽車はやがてトンネルへ差し懸りましたが、子供は相變らず、愉快相にして居りました。

私は餘り不思議でしたから、次の驛に近づいた頃、此子供と恁那會話を始めました。

「君は一人で淋しかありませんか」

其子供は首を横に振りました。

「お母様と別れて來たんぢやありませんか」

子供は頷いて、暫時、考へ深さうに黙つてゐましたが

「でも私のパパさんが一緒に居ります」

「では、あのステーションへ汽車が着くと窓の外へ来て、莞爾するのが君のババさんかね？」

と聞くと、大きく頷いて、其淋しならない秘密を話して呉れました。

「私のパパさんが、此汽車を動かしてゐるの」

此子供の父は、其列車の機關手であることがわかりました。これが此子供の一人旅をしても悲しがない秘密でありました。息子と顔を合はせるのは、たゞステーションに着く時、それもほんの僅かの時間眺めるだけですが、父は其息子の事を一秒間でも忘れて居るのではありません。父は列車の先頭に繋いだ大きな光つた機關車に乗つて居りました。そして手を機關の把手にやる毎に、石炭を釜に投げ入れる毎に、自分の幼きな子供の身の上を考へました。目前にはゐないが、父の心は断えず子供に引き付けられてゐました。

「お父様が列車を動かしてゐる間は大丈夫」

恚う思つて僅か七歳の子供は淋しがらなかつたのであります。今機關を動かしてゐる同じお父様の手が、夜眠る前には自分を膝の上に抱き上げて下さるので、散歩の時には手を引いて下さるのである。此事が此子供の安心の基礎でありました。

皆様、時には皆様のお母様が長い長い此世の旅に、皆様を獨りぼつちに棄てゝ行かれる事があります。時としては、私達は唯一人知らぬ他人の中に立ち混つて心細く感じて、泣き出したくなる事があります。然しどんな場合にも淋しがつたり、恐れたりする必要はありません。皆様の天の父上が此世と云ふ大きい列車を動かしてゐなされるのであります。愛の神様が皆様一人一人を断えず氣に懸けて居られるのであります。神様は愛であります。此世の中は神様の家庭であります。私達は皆其家庭の一員であります。

イエス様は私達に仰せられました。

「我は世の終末迄常に爾曹を偕にあるなり」と。

聖書の算術

二羽の雀は一錢にて售に非ずや、然るに爾曹の父の許なくば其一羽も地に限る
こと有じ 馬太傳第十章廿九節

今日は一つ不思議な算術のお話をいたしませう。

皆様は誰でも、簡単な乗算が出来たらうと思ひます。

「二の二倍はおいくら？」

と尋ねましたら、皆様は直様

「四であります」

と答へるに相違ありません。四則を知つて居れば誰でも出来る筈ですから。

「五人の英雄が百人に當る事が出来るとしたら、百人の英雄は何人に當る事が出来るか？」

と云ふ問題を出したら、暗算の上手な皆様は一寸考へて

「二千人であります」

と、苦もなく答へるだらうと思ひます。處がさうではないのであります。成程普通の算術では、それは正しい答ですが、聖書の算術で計算すると、そんな答が出ないのであります。

馬太傳の第十章二十九節にキリスト様が申された言葉に

「二羽の雀は一錢にて賣るに非ずや」

と、あります。然るに路加傳第十二章六節には

「五羽の雀は二錢にて賣るに非ずや」

とあります。即ち此場合に於ては「 $5 \times 2 = 10$ 」となつて居るのであります。どうして斯うなるのでせう？キリスト様は度々市場へ出入りなさいました。そして雀の賣買される有様をよく御覽になつたに相違ありません。ユダヤでは雀は最も有

ふれた小鳥でありまして極めて安價に賣買されたのであります。二錢持つて行けば、一羽だけおまけがあつて、四羽でなく五羽だけ買へたのであります。キリスト様は此最も普通な小さな鳥によつて父なる神の御愛護を御教へになりました。

商賣人にとつて一羽や二羽はどうでもよい此雀、然も神に於ては其一羽をも忘れ給はず、天の父上の許なくば其一羽も地に落ることは決してないのであります。もしさうならば天の父がどうして少年少女達を御心にお懸けなさらない筈がござらぬか。

「故に懼る、勿れ、汝等は多くの雀よりも優れり」

舊約聖書の利未記第二十六章八節にも亦不思議な算術の例題が出て居ります

「汝等の五人は百人を逐ひ、汝等の百人は萬人を逐ふならん」

普通の計算で行けば

「汝等の百人は二千人を逐ふならん」

とあるべき處です。此を式で表しますと $100 \parallel 20 \times 5 \ 2000 \parallel 20 \times 100$ となります。

然し乍らこれは聖書の算術ではありません。聖書は申します。此處に神様の小さな團體がある時、それが二十倍だけの大團體になれば、たゞに二十倍だけ力が増すのではなく、百倍だけの力を増すのであると、どうしてさうなのでせう？ 其理由は、神様の民が一人でも餘計に團結すれば神様はそれ以上幾層倍の御働をなさる事が出来るからであります。

申命記第三十二章三十節にはもつと驚くべき聖言があります。「いかでか一人にて千人を逐ひ二人にて萬人を敗ることを得ん」即ち $1 \times 2 \parallel 10$ となる勘定であります。どう云ふわけでせうか。私達が偕に力を協せて働く時には、一人一人で働く時よりも、神様がより以上に私達を助けて下さるからであります。キリスト様の聖言に

「わが名の爲に二三人の集れる處には、我も其中に在ればなり」(馬大傳第十八章二十節)とありますが、私達が偕に主の御用の爲にキリスト様の名に於て集る時は、離れ離れに居る時よりも、より近くキリスト様が其の傍に居たまふのであります。私達が皆一つになればなる程、彼は私達に近く居給ひ、主の爲にいよいよ力強く働くことが出来るのであります。

どうして信者が一緒になつて教會をつくるか、各々家で祈禱するだけで満足出来ないで、澤山の人と一緒に祈るのか其わけがこれで解るであらうと思ひます。

皆様も、一人ぼつちの弱い信者とならず、出来るだけ早くキリスト信者の團體の一人となるやう心懸けねばなりません。皆様がキリスト様を愛してゐる他の人々と偕に立てば、一人でやるよりも十倍以上の善い業が主の爲に出来るのであります。バラバラになつた火の餘燼はちぎりに消えますが、一緒に集めれば

輝く焰となります。我々が偕に働き偕に祈る時、神様の愛と力の火は、我々の真中で燃え上ります。神様の火のある處には必ず力がああります。

短篇説教 (1)

何時だらう？

すべての事に時あり、天が下にて人の爲すすべての業に期あり

傳道之書第三章一節改譯

「今は何時だらう？」

此は最屢々人の唇に上る疑問であります。

何か遊戯か、仕事をやつてゐる最中、私たちの心に浮ぶ考は「時間はあるだらうか」といふことであります。而して私たちは、懷中時計を見るか柱時計を眺めます。

然し熟く考へますと、柱時計が時を計るのではなくて、地球が太陽を公轉

するために、一年と云ふ時期が刻み出されるのであります、月の盈虧が、一年を十二分する原因となるのであります、地球の自轉が、晝と夜とを織り出すのであります。

此等のことが、大宇宙は神様の大時計ではあるまいかと云ふ思想を私たちの胸裡に興させます。

大空と大地は常に「今は何時である」と私たちに物語つてゐるのでありますまいか。

柱時計はほける時もありませう。然しこの時計には誤りが生じません。地球の顔面を一寸眺めさへすれば、今は一年中の何時にあたるか、直ぐ知れます。

庭の垣根に梅が匂ひ始めれば、冬は逝つて、春が今や臨むことを語ります。樹蔭が淑やかに澤沼に微笑み出せば、夏が戸口に近づいたのを知ります。樹

々が野山に紅葉を織れば、秋が訪れて来たのを感じます。ハラリハラリと木の葉が散れば、厳しい冬が迫つて来たことを直ちに認めます。

同様に、もし私たちが、庭園の草花を充分熟知してゐましたら、草花によつて一日の時間を讀むことが可能でありませう。不精な人間は頗る不規則に寢起をすると致しましても、草花は時間確守の手下となつて人間を戒めて呉れます。花には各々自分の時間が定まつてゐて、必ず之を嚴守し決してその時期を間違へません。

ある時一人の植物學の大家が、自分の庭園を時計の時間面の型に、栽つたことがありました。

九時に開く花には、九の文字を示させ、十時に開くものには十を示させました。斯様にして十二時の花文字が出来ましたら、學者が、庭を歩く時には時計を持ち回る必要がありませんでした。彼は萎んだ花文字の數によつて、

過ぎた時間を計りました。

私たちの生涯は此庭園に似寄つてゐないでせうか。

皆さんは、まだ若い方々のみです。皆さんの前には長い、有望な馳場が横たはつてゐます。

けれども既にある花は最早萎んでゐます。而して新しい花は開きかけて居ります。皆さんが、嘗て大好きであつた遊戯を、皆さんは今は見向きもしないで居るではありませんか。さうかと思ふと今迄氣に懸けなかつたことに、皆さんの心が向きかけて居るではありませんか。

此等のことは、一體何事を表示してゐるのでありませうか？
皆さんが、漸次年を召して、今や夜が近づきつゝ、あると云ふことを表示して居るのであります。(これは神様の聖靈の警報であります) 神様は時期の進まない間に、皆さんの心を我に托せよと督促して居られるのであります。

神様に立歸るには、早過ぎるとか遅過ぎるとか云ふ杞憂はチツトも要りません。

「今は恩恵の時、今は救の日」であります。

私たちの心の中にある罪は「まだ早い早い」と申します。けれども神様は常に「今といふ時期に」悔改めよと勸めて居られます。

殊に所謂ティーンエーヂ(十三才から十九才)の皆さんの年齢好が、天の父に信仰を結ぶ最も善い時期なのであります。「特に汝の若き日に汝の造主を記憶ゆべし」皆さん、今は何時でありませうか。

聖書の「コドモページ」

なんぢら悪魔の奸計を禦ぐん爲に神の武具を以て裝ふべし

以弗所第六章十一節

新約聖書の中に「コドモページ」のある書物が一冊あります。それは以弗所書であります。以弗所書の第六章にはパウロが特別に子供に宛て、書いたページがあります。

以弗所書を書いた頃、パウロはローマの牢屋に居りました。パウロは別に牢に入れられるやうな悪事をしたわけではありませんが、唯「ヤン」だと思ふので憎まれて牢へ入れられたのであります。牢の中には一人の兵卒がパウロの番をして居りました。或日パウロはエペソ市の古い友達に手紙を送らうと思ひました。で、パウロは早速手紙を書き始めました。数ページ書いて署名をしようとした

時、考へた事は

「エペソの子供達にも何か書きたい。さて何を書かうか。子供達の親へ書いたやうな事を書いたつて分らないし」

と、一寸首を傾げて何気なく四邊を見廻しました。不圖目に止つたのは傍に立つてゐる番兵でありました。

「さうだ、さうだ、子供達に兵隊の持つてゐる武器の話を書かう。屹度喜んで讀むだらう」

と、多分こんな風に考へてパウロは以弗所書第六章十一節から十七節の神様の武器の話を書いたのだらうと思ひます。

昔の軍人は槍や矢を避け、劍の襲撃から身を守る爲に色々の武器を持つたのであります。軍人に武器がなかつたなら防ぐ事も、戦ふ事も出来ません。かういへば

「でも僕等は戦争をして居ないのだから、武器の用事はありません」
と云ふ人があるかも知れませんが、皆様には皆様の戦争が毎日あります。それは悪魔との戦争です。

パウロは「汝等悪魔の奸計を禦がん爲に神の武器を以て装ふべし」と申しました。

悪魔こそは、私供即ち神様の軍人の大敵であります。悪魔は吼ゆる獅子の様に逼行つて私共を餌食にしやうと狙つてゐるのであります。茫然してゐると何時の間にか私達は悪魔の奸計に落入つて悪い事を行ふやうになるのであります。悪魔は色々の手段や奸計を以て私共の隙を窺ふて居るのであります。嘗て印度で或軍隊が夜營を致しました。其夜一人の歩哨はある場所へ送られました。處が翌朝になると其歩哨は殺されてゐました。どうして誰に殺されたのか少しも様子が知れませんか。他の歩哨を調べても何事も分りませんでした。

其夜また同じ處へ新しい兵卒が歩哨に立ちましたが、夜が明けてみると、またまた殺されてゐるではありませんか。そこで隊長は、其最も信用してゐる兵卒を呼んで

「今晚はお前があすこの歩哨になつて貰ひたい。よく氣を注げて何者でも見通してはならない。若し何か動くものを見付けたら、すぐ様發砲するんだ。い、か」

と命じました。やがて其日も暮れましたので其兵卒は命せられた場所へ歩哨として立ちました。始めの數時間は何事もなく過ぎました。夜は次第に更けました。四邊は静寂として何の物音も聞かせません。折から何か木の枝の折れるやうな響かして、枯葉を踏みくだいて何者か靜かに近よつて來るやうでした。

「誰だ、其處へ來るのは？」

と歩哨は大きい聲で尋ねました。けれども何の答もありません。

「これは何かの聞き違ひだらう」
と歩哨は考へました。すると今度は向ふから何かか動いて來るのを見つけました。ですぐ様發砲しやうとしてよく／＼見ると一疋の大きな犬が藪の中を匍ふて行くのでありました。

「何だ犬か、馬鹿々々しい」

と構へた銃を持直しましたが、何でも動く物を見たなら發砲せよとの隊長の命令を思ひ出して、また銃を構へてドーンと發砲いたしました。犬はバタリと其處へ倒れました。ところが犬の横たはつた所へ駆けつけて見ると、それは犬ではなくて犬の皮を被つた印度の土人でありました。毎夜此印度人は犬の皮を被つて歩哨線に近寄り、氣付かれないやうに歩哨の傍迄忍び寄つて歩哨を殺したのであります。

パウロは申しました。「愛する少年少女諸君！氣を注げなさい。悪魔は諸君を

窺つてゐる、色んな姿に身を扮して諸君の傍へ近寄らうとしてゐる。天使のやうな姿をして、親切な友人のやうな顔付をして諸君を誑し討に會はせやうとしてゐる。だから注意なさい。一刻も油断してはなりません。神の武器を身に附けて悪魔の奸計を禦がねばなりません。

私達が安心してゐる隙へ附込んで、悪い誘惑は私達を亡滅の淵へ突き落さうとして近寄つてゐるのであります。

私共は常に神様の武器を以て身を装ふて立つてゐなければなりません。以弗所書の此コードモページは皆様が幾度も繰返して讀む必要があります。

神の武器

神の全き武器を以て裝ふべし 以弗所書第六章十一節改譯

パウロは茲に「汝等神の全き武器を以て裝ふべし」と勸めて居ります。武藏坊辨慶は常に七つ道具を持ち歩いたさうであります。此處には悪魔と戦争する爲の武器として六つのものが録してあります。即ち帯と、護胸と、鞋と、盾と、冑と、劔とであります。そして重に身體の前面を守る武器であります。背面を守る爲の道具は一つも擧げてありません。もう一つあれば丁度七つ道具になりますのに、パウロは迂濶して書落したのでありませうか。い、ね、忘れたのではありません。神様の武器には背面を守るやうなものはないのであります。敵に背を見せて逃げるやうな臆病者か、卑怯者の外、背に傷を受ける心配はな

いのであります。

昔ギリシヤでは、戦地から息子が負傷をして後送されて参りますと、何よりも先に、お母様が調べた事は、傷は背面にあるか、胸の方にあるかと云ふ事でありました。そしてもし傷が背面にでもあるのを發見した時には、母親は、敵に背を見せるやうな息子をもつたのを恥ぢて大層悲んだのであります。

神様は私達に背面を守る爲の武器は一つも下さりません。私達が悪魔に向つて進軍し、罪惡と相面して勇ましく戦ふ事を神様は望んで居られるのであります。パウロは今私共に神の全き武器を以て——神の武器全體を以て裝ふべしと勸めて居ります。一つ二つだけ著けて外の武器を捨て、置くのではありません。もしさうしないならば、悪魔は必ず隙を狙ふに相違ありません。夜寝る前に泥棒用心の爲に見廻りますが、小さい窓一つ位と思つて開け放して置けば、そこから泥棒が忍び込むかも分りません。

或人が大變値の高い馬を飼つて居りました。勿論大切にして、毎晩寝る前には厩舎を見廻り、戸口には堅く錠を下しました。其邊には屢馬泥棒が出没するからであります。厩舎には、三ヶ所戸口がありました。前面の大きな扉の外に、横側に小さい扉が一つと、後側に今一つの扉が附いてゐました。或晩、馬の持主は、先大戸を閉て、次に横側の入口に錠を下しましたが、後側の扉はそのまゝにして置かう、大丈夫だらうと申して開いた儘家に戻つて寝みました。處が其の晩泥棒が來ました。泥棒は先づ大戸を開けやうとしましたが、堅く閉てあるので、どうしても開きません。横側の戸口から這入らうとしましたが、其處も駄目でした。おしまひに裏側へ廻つて見ました。其處の扉はスウツと難なく開きましたので早速中へ忍び込んで馬を盗み出しました。安心して錠を掛けなかつた裏側の扉、其處から泥棒は這入つたのであります。如何して神様が武具を残らず附けよと申されるか、其わけが分るでせう。もし少しでも隙

間があれば、其處から、魔がさすからであります。私達は神様の武具を以て隙間なく心と靈魂を守らなければなりません。ギリシヤの英雄にアキレスと云ふ人がありました。實に勇氣に充ちた豪い軍人でありました。矢も劍も槍も彼を傷つける事は出来ませんでした。永年の間アキレスは軍人の花と謳はれてゐましたが、此強いアキレスの身體にたゞ一ヶ所だけ弱い部分がありました。彼の踵の弱いと云ふ事が彼の弱點でありました。彼の敵が其事を知つて、アキレスの踵を目懸けて毒矢を放しますと狙ひ謬ました。毒矢は踵を刺し貫しましたので、さしものアキレスもどうとう倒れました。惡魔は私達の弱點をよく知つて居ります。私達が油斷をして神様の武具で以て其處を守つて居りません時には、忽ち附込まれるのであります。其故に斷えず「神の至き武具を以て裝ふ」て居なければなりません。

誠を帯とすべし

汝等立つに誠を帯として腰に結ぶべし 以弗所書第六章十四節

誠を帯として締める話の前に皆様に一つ申上げねばならんことがあります。それは外でもありませんが、神様の武具は一時でも手離してはならないと云ふ事でありませぬ。

寒い日に外から歸れば、私共は外套を脱ぎますし、寝る前には、晝着てゐた着物を脱ぎます。然しながら、此からお話する神様の武具は、どんな場合にも、どんな時にも脱いだり、外したりしてはならないのであります。

オリヴァー、クロムエルと云へば、イギリスの名高い將軍であります。クロムエルは、夜でも晝でも甲冑を身體から離した事はありませんでした。他人

が不審がると大將は答へて、「常に用心してゐなければ、何時敵が攻めて來るかも知れないからだ」と申しさうです。

私共も同じ様に何時悪魔の誘惑があるかも知りませんから、束の間も、神様から賜はる武具を外してはならぬのであります。パウロは神様の武具として六つの名稱を擧げて居りますが、それが一等大切なものでありませうか。

冑か、盾か、劍か、護胸か、靴か、頭を守る冑か、或は胸を護る護胸か一等大切のやうに考へられます。

然しパウロは先第一に「誠を帯とすべし」と申して居ります。帯は決して單なる裝飾品ではありませぬ。どの武具も皆帯によつて支へられるのであります。護胸も帯で支へられ、脛當や靴も其紐は帯へ結んであります。劍も帯にある鉤へ吊るのであります。盾も使はぬ時には帯の脊の方の側へ縛つて置くのであります。恚う考へて見ますと、帯は軍人の持つ武具の中で一等大切な役目をする

のであります。尙又帯を腰に結ぶ事によつて衣服全體に纏まりが附くのであります。

ですからパウロは先第一に、外の武具にも優つて、我々は誠を帯とせねばならないと申したのであります。神様の軍人は、如何な場合にも誠實を以て身を引緊めてゐなければなりません。悪い友人や、悪い人達が色々な奸計を以て私共に向つて來ましても、私共は「惡を以て惡に報ゆる事なく」始終誠を以て貫かねばなりません。屏風は曲げなければ立たないかも知れませんが、私達は斷然生一本の誠を以て立たなければなりません。

いくら學問が出來ても、いくら才があつても、もし其人が誠を帯として居りませんならば、神様の軍人たるの資格はないのであります。誠は最後の勝利者であります。誠は天を動かします。串談半分に平氣で嘘をついて喜んでゐる人がありますが、そんな人は、見かけは美しくつても中味の腐つた林檎のやうな

人でありませぬ。其様な人程有害無益な厄介者は世にありません。そんな人を頼むのは、砂の上に家を建てるやうなものであります。立派に着物を著けてゐても、帯を締るのを忘れてゐるやうな人が時々ありますが、眞實にだらがしなくいやなものであります。誠を缺いてゐる人は丁度帯なしの人のやうであります。昔、ペルシャに嘘を三度云へば、一生話を禁せられる法律がありました。今もし、そんな法律が行はれてゐるとしたらどうでせう。舌があつても一生啞のやうに黙つてゐなければならぬ人が少なからず出て來るかも知れません。私達は常に此「誠を帯」とする事を忘れないやうに致しませう。

聖書には、よく何々を「腰に結ぶ」と云ふ言葉がありますが、其意味は確乎と帯を締めると云ふ事でありませぬ。駈つくらをする場合でも、何か激しい仕事に取掛る場合でも、もし帯が弛んで居れば思ふやうに走つたり働いたり出來ませんから、先第一に帯を締め直す必要があります。

皆様は前途有望な、將來の永い人々であります。故に、殊に此誠を帯とする事を學ばなければなりません。

短篇説教 (2)

髪の毛の綱

爾曹の頭の髪また皆かぞへらる

馬太傳第十章三十節

京都の東本願寺は、之を建てるに滿十七年間かゝり、二千万圓の大した物入をしたと云ふ話であります。何でも九十六本の大柱があり、其高さは各々四十二尺、周圍は四尺平方のこと。其骨折から苦心といふものは。言葉に盡し難い程であります。然も此大建築物が悉皆愛から出た奉仕だといふから可驚ことではありませんか。

けれども尤可驚ことは其外庭にある澤山の綱であります。綱の数は合計五十三本ありまして、其中一等大なのは、長さ三百尺、周り一尺三寸、重さ

二百八十貫目あるさうで、一等小さいのでも、長さ十五尺、周り四寸四分重さは八貫七百五十目あり、五十三本の總目方は實に一千〇五十一貫六百五十目あるとのことですよ。一體此等の綱の材料は何でありませうか。髪の毛です。婦人達の献上した緑の黒髪です。

男の人達が必死になつて寺院建築の真最中、婦人と少女達もたゞ黙つて傍觀して居れなかつた。何か私も致したい、けれども何が出来るだらう？力が無い、金銭が無い、時間がない、考へれば考へる程、無いものづくし、然し——何と云ふ仕合せなことだらう——私に髪がある。長い黒髪が房々と背に、たとへば黒耀石のやうに輝いてゐる。

さうだ！さうだ！この毛髪を!!!

お婆さんは胡麻塩髪を、若い婦人は濡羽色の結髪を、少女達は垂髪を、思ひ切りよくスツバリと切り離して献げたのであります。此が幾本かの綱とな

り、其髪綱が材木を曳出すために用ひられました。

毛髪は婦人にとつて、生命に次ぐ大切な飾であります。それを献げた婦人達の心榮を想像してごらん下さい。

東本願寺は死者追憶の爲に建造せられた寺院であります。彼等は死人の爲にかゝる愛の奉仕をいたしました。皆さんは、今も尙生きて居られるイエス様に、如何な奉仕をいたしてゐますか？

路加傳第七章三十六節以下に記されてある一婦人の奥床しき心の香を、皆様の清い心の花辨に移したくは思ひませんか。

部屋一ぱいに満るナルドの香油のかほり、それにも優るは、心の甕に溢る、イエス様に對する美しい奉仕の精神であります。

「頭の髪また皆敷へらる」イエス様は、髪綱の献上を求め給はぬかも知れませんが、然し我國三千万餘の婦人達より、愛の奉仕を期待して居られます。

義の護胸

義を護胸として胸に當つべし 以弗所書第六章十四節

英國ロンドンに、ロンドン塔と云ふ名高い建物がありますが、其中に有名な武器庫があります。此武器庫には、世界中の珍らしい色々な武器が集めてあります。昔の英國の皇帝や、諸侯が戦陣に臨む場合に用ひた盾だの、冑だの、劍だの、槍だのが陳列してあります。神様の武器庫には、そんなに澤山の武器はありませんが、大切なものは残らず備へられてあります。パウロは誠を帯として腰に結んだならば、其次には「義を護胸として胸に當てよ」と私共に勧めてゐます。

護胸は、軍人にとつては是非共なければならぬ大切な武具であります。胸は

正面から敵に露はる、處でありまして、而も身體の大切な部分であります。即ち肺臓や心臓がある所でありまして、是を護るに一點の隙もあつてはなりません。神様は、胸を護る爲に随分堅固な設備をなさいました。私の子供の頃によく胸を突き出して「此處を打つてみる！」と云つて威張る、子供がありました。ごんなにひどく打たれても平氣である様子を私に見せたかつたのであります。ごうして、そんなに胸は強いのでせう。其内側の心臓や肺臓を守る爲に、頑丈な骨や筋肉が保護してゐるからであります。然し戦争に出る時には、骨と肉とだけでは槍や劍に當る事が出来ませんから、鋼鐵製の護胸が必要になるのであります。パウロは「義を護胸として胸に當てよ」と申して居りますが、「義」とはごう云ふ事でせうか。

義とは正しい事を實行することでありまして、公明正大のことでもあります。謀や色々な小細工をしないことでもあります。例へば敵に様々の方法を以て

やつて来ても、こちらは飽迄も正々堂々の陣を張つて向ふ事でありませう。護胸が實戦の場合に傷を受ける事から我等を守るやうに、悪魔から傷つけられない一等善い方法は、義を以て悪に向ふ事でありませう。私達が何か後めたい事を行つてゐる時、其時程私達の弱い時はありません。然しながら私達が義を護胸として神と人の前に何等の疾しい事を行つてゐない時程私達の強い時はありません。神様の軍人が義を護胸として立つ時には、どんな者も恐ろしくないのであります。昔ルーテルと云ふ人が正しい信仰を告白した爲に世間から大反對された時に「例令悪魔の数がウォオルムスの屋根の瓦より多くつても自分は決して恐れない」と申しましたが、其わけは彼が義を護胸として附けてゐたからであります。常に悪事を行つてゐる人は、表面は強さうに見えますが、實は悪人程憶病な者は世の中にないのであります。悪人は風の音や鳥の鳴く聲にもビクビクするのであります。

ある醫者の話に、病氣の十分の九は、大抵何が悪い行の結果だごありましたが、世の中の人々が常に正しい行のみをしてゐますなら、病氣は屹度半分に減つてしまふであります。

平和の靴

平和なる福音の備を靴として足に穿くべし 以弗所書第六章十五節

パウロは神様の軍人である私達に平和の靴を穿くべしと申してゐます。軍人と平和の靴、何だか御門達の様な氣が致します。護胸にしる、盾にしる、劔にしる、其外の神様の武具は皆戦に縁のあるものばかりであるのに、どうして平和の靴を穿けなごど勧めたのでせうか？

其頃の靴は、現今のやうに革製のものでは無く、革紐で編んだ草鞋のやうなものでありました。靴は身體の動作を活潑にする爲に大切な履物であります。

もし皆様が冬の寒い朝、靴を穿くの忘れて學校へ行つたとしたら如何でせう。堅いデコボコ道に、屹度皆様の足は傷められて、終には歩けなくなるに相違ありません。靴は私共の足を保護して呉れます。身體全體の動作を輕快に

させて呉れます。キリストの教を平知の福音と申しますが、人はイエスキリスト様を信する時に其罪を赦されて、神様と親子の名乗をする事が出来るのみならず、今迄睨み合つてゐた人々とも不思議に仲直りをする事が出来るやうになります。自分を憎む敵に向つてすら愛の心を以て「我兄弟よ」と云つて手を握る事が出来るやうになるのであります。神様がイエスキリストに依て、今迄どうしても離れる事の出来なかつた罪を取除いて下さつたと信する其時に、私共から重荷は取去られます。恐怖と苦痛とは一切なくなります。そして心に喜と平和が充ちて來

て、心も足もひとりでに小鳥の様に輕やかにるのであります。心の底に此平和が宿る迄は、充分に此世の中の悪事と戦ふ勇氣が出て參りません。もし皆様に一冊の書物が渡されて、いつでも怒の語や不親切な語を口にした

際には、一ページつゞ破りなさいと命令されたらどうでせう。いつ迄其書物が元のまゝの厚さで残るでせうか。

私共の行く處 私共の足の向ふ處、そこには必ず平和を携へて行きたいと思ひます。そして私共が人に對して雲となる事なく誰に對する場合にても光と滋味を與へる太陽となるやうに努めやうではありませんか。それには、どうしても、イエス様の平和の福音を靴として常に足に穿いてゐなければなりません。

信仰の盾

此の外信の盾を取るべし 以弗所書第六章十六節

盾を見た事がありますか。ローマ時代の昔の盾は革で作つてあつて、幅が一尺五寸か二尺、長さが四尺ばかりで、左手で持つやうに作つてあります。

盾は敵の箭を防ぐ爲に最必要な武器であります。形は橢圓形、圓形、長方形など色々のがありました。材料は眞鍮のもあれば木製や革製のもありました。

奢つた人々は黄金製のを持つてゐました。ソロモン大王は、澤山の大きな黄金製の盾を作りました。盾は武器の中でも殊に大切な道具でありまして、其頃の軍人は敵から箭が飛んで來るのを見ると、直様盾を持出して自分の身を護りました。飛んで來る箭は盾で支へられてしまひました。或は敵が劍を揮つて斬込

んで来る場合にも、盾で受止めたのであります。盾を上手に用ふれば自分の全身を護る事が出来ます。盾が無かつたならば、どんな勇士でも思ふやうに戦争が出来兼ねます。そして、これが悪魔との戦争に格別に大切なわけは、即ち「悪魔の火箭」を禦ぐ爲であります。火箭は何時、何處から飛んで来るかサツバリわからない。だから一層用心しなければならぬわけですから。思はぬ時に、思はぬ方向から、悪魔の火箭は私達を目懸けて飛込んで来るかも知りません。悪い友達の話、悪い書物、悪い観覽物、悪い活動寫眞などは何れも悪魔の火箭です。目から耳から、私達の心の中に恚の様な箭を射込まれる時に、いつの間にか私達の清い心も一等大切な信仰も焼き拂はれてしまふのであります。然しながら、信仰を盾に取つて進む時、世の中に何一つ恐るべき物はありません。暗の夜に、たゞ一人で淋しい野道を行くと云はれたならば一寸尻込をするのでせう。然し、もし皆様のお父様が一緒に行つて下さるのでしたら、どんな臆病な子供

でも少しも恐れなくて、大膽に行く事が出来るだらうと思ひます。危険な事があれば、屹度お父様が守つて下さると、信じてゐるからであります。イエス様は私達の盾です。イエス様が十字架の上に命を損て下さりませんでした。恐ろしい罪の罰は容赦なく私達の上に降り懸つて来る筈でありました。そして悪魔の火箭は必ず私達を殺してゐたに違ひありません。然しイエス様は私達の受くべき筈の苦痛と罰とを、自分の身を盾として受止めて下さいました。十字架上のイエス様が私共の眼前に明かであります時には、どんな患、苦痛の前にも大膽に立つ事が出来ます。それはイエス様が私達の盾となつて下さるからであります。イエス様は常に私達と悪魔との間に立つて私達を守つて下さいます。彼を信する人のため、彼はどんな攻撃にもビクともしない盾となつて私達を其陰に隠して下さいます。

お父様が共に居て下さつたら暗の夜も恐れないう様に、イエス様が一緒に居て

下さるならば死も恐るゝに足りません。イエス様は、お父様が私達の手を取つて導いて下さるやうに淋しい死の陰の谷にさしかゝる時にも、先立つて天国へ導いて下さいます。信仰の盾を固く手に取つて向ふ時、死にさへも打勝つ事が出来るのであります。皆さん信仰の盾を只今から取り上げやうではありませんか。

短篇説教 (3)

夜の歌

彼(眞神)は人をして夜の中に歌を詠ふに至らしむ 約百記第三十五章十節

或家の鳥籠に小鳥が飼はれて居りました。大層快活な小鳥で、朝から晩まで、幸福の歌をうたつて居りました。もう謠はないでは一瞬も居られないのでした。心の泉に喜悦の譜が絶えず高鳴るものですから。朝日の軟かい指先が静かに優しく、小鳥をゆすぶりますと、小鳥は直様目を鈴のやうに瞠つて愉快相に、「日出の曲」を奏するのであります。その樂聲は、たとへば、白金の甕から轉がり出づる水の響のやうでありました。

花が籠の周圍に、微笑み始めますと、「愛の曲」を奏するのであります。その旋

律は、たとへば水蓮の間を逍遙する小川の水の囁きのやうでありました。時々、此楽しい小鳥の宮殿へ、大きな人間の手が訪づれてまゐります。然し小鳥はチツトも恐怖ません。其時には必ず何か甘味い御土産がありますから、或時には、宮の扉から人間の手へと、小鳥は飛移りまして、歡喜に聲調を慄はせながら、「感謝の曲」を奏しました。その音調は、たとへば、天空に高吟する雲雀の歌のやうでありました。

ところが或日、人間の手が、何だか黒い布を携へて訪れてきました。瞬間に、輝く太陽の光線は遮断れてしまひました。太陽の光が小鳥の歌の動機であつたものを。小鳥は身も世もあらぬ程、恐れしました。格子に打突かつてみたり扉にすがつてみたり最初の間こそ、バタバタと騒いでもみましたが、其中に到底駄目だと覺悟して、暗い籠の底に屈んで打慄へて居るのでありました。やがて歌が、小鳥自身の歌に數等層つた樂聲が風の間間に漂ふて参り

ました。けれども驚きに度を失してゐるので、小鳥の耳へはいりませんでした。

翌日もまた、暗い蔭が小鳥の宮殿を包みました。小鳥は再び、恐怖に圍まれて縮んでゐました。すると可驚の音が流れて参りました。小鳥は凝然して耳を澄まして居りました。やがて光が籠の中に注がれた時、小鳥は其歌を回想して、二三節低い聲で繰返して見ました。これを聞いて小鳥の主人は、合點いて、微笑みました。夜のやうな暗黒が周圍を蔽ひますや、心臓は恐怖に慄ねながらも、小鳥は、一層の熱心をもつて見にざる世界からの歌の聲に聴き入るのでありました。二三度口の中で試みてから、小鳥は頭を振上げて、勇ましく「新天地」の曲を奏し始めました。主人の喜悅は如何程でありましたらう。

其後は、暗黒が臨みます毎に、勿論一種の恐怖に襲はれながらも、小鳥は、

ひたすら耳を傾けて、闇を透して響いてくる調を學ぶことに専心いたしました。

少年少女諸君！皆さんの靈魂は、神様の小鳥ではありませんか。神様が皆さんを御訪ねなされる時には、必らず何か善いものを御贈り下さいます。然大抵の場合、黒い雲影に添へて最善良ものを御分與下さるのであります。暗い悲愁の影が、皆さんの身に振かゝる折、靜に耳を澄ましてごらん下さい。其時に、新しい歌が漂ふてくる。神様は其歌を皆さんに教へやうと望んで居られます。

彼は人をして夜の中に歌を歌ふに至らしむ、人類のなし得る最大のことはかゝる歌を見わざる世界より聴き取つて、之を全世界に反響させることである。

救の胃

また救の胃を守るべし 以弗所書第六章十七節

胃は頭を守る爲に大切な武器であります。護胸と同じく或はそれよりも大切な物であります。云はゞ人間一切の活動の參謀本部とでも云ふべき頭腦を保護する爲の道具ですから、充分念入りに善い胃を撰ばなければなりません。皆様は火事の際、炎々と燃ゆる火の中へ勇ましく突き進んで消火に骨折る消防夫を見た事があります。消防夫は皆異形な帽子を被つてゐます。あれは頭に負傷をしない爲であります。何處から煉瓦や、木の燃片が落ちて來るか分りませんから、もしそんな事があれば、すぐ死んでしまふからであります。同様に神様の軍人にも胃が入用です。即ち救の胃であります。此胃は大切な

私共の靈魂を守るものであります。此胃を或は救の望の胃とも申してあります
 (帖撒羅尼迦前書第五章八節)

どうして救の望を胃として居れば大丈夫なのでせうか。救とは危険から安全に移される事でありませう。今迄水の中で溺れかゝつてゐた者が、最早死ぬ心配のない島の上に引き上げられたとするならば、即ち其人は救はれたのであります。イエスキリストに救はれますと、人は其心の中に恐怖が無くなります。どんな苦しい事が臨んでも、重い病氣で生涯寝てゐなければならぬ様な事が起つても、常に喜んで望に充ちて、明るい心をもつて居る事が出来ます。例令世界中を我物としても、私共の生命が亡んでしまつたら何の益もありません。私共は例令世界中を失つても、靈魂の救はるゝ望が出来れば満足して其日其日を暮せませう。イエス様を信じない人程氣の毒な人はありません。いくらお金があつても、いくら立派な肩書を持つてゐても、いくら世の中の人から譽められても、

一度死が其人を見舞ふ時に、そんなものは何の役にも立たず、唯泣き悲むより外仕方がないのであります。然しイエス様を信する人々は死んでから先にも尙望をもつのであります。今一度死に別れても、再びイエス様の御許で昔語をする事が出来るのであります。

皆様は既に此救の胃を被つて居りますが。イエス様による救の望をハッキリと望んで居りますか。此外別に救ある事なし。イエス様に依頼む外、私共の靈魂の救はれる見込は世界中何處を探しても決して無いのであります。

聖靈の劍

聖靈の劍即ち神の道を取るへし 以弗所書第六章十七節

今迄お話いたしましたのは皆護身用の武器でした。帯も護胸も靴も盾も冑もそれを以て敵を攻めるわけには参りません。此等の武器が揃つてゐても、もし劍がなかつたら戦争は出来ないのであります。

嘗て英國で、エドワード第六世の即位式があつた時、英國と愛蘭と佛蘭西の王である事を示す爲に三振の劍が王様の前に運ばれました。王様は其劍を受け取つて、御自分の前に置かれて申さるゝ様
「今一振の劍がある筈ぢや」
と。

「どの劍でございますか」

と御側の者が御尋ね申上げますと

「聖靈の劍、即ち神の言」

と御答へ遊ばされたさうであります。其以來英國では、王様の即位式がある度に、必ず大帝國の劍の一つとして聖書を其手に御渡しする慣はしになつたと云ふ話です。

パウロは聖書を劍だと申してゐます。聖書は劍と何か縁があるのでせうか。第一、聖書と劍と似た點は、破す事が出来ないといふ事です。尤も鈍刀は別であります。正宗の名刀などは、何百年立つても昔のまゝの輝きと鋭さを保つて居ります。聖書程、多くの人から繼子扱ひを受けた書物はありません。二千年の永い間、どれ程の人が神様の言を破さうと試みたか分りません。然し二千年前に、力があつたやうに、聖書は今日でも同じ輝きを持つて居りまして

少しも鈍くなつて居りません。

其二は、劍が物を断ち切るやうに、聖書は人の心の奥底迄も刺し貫きます。

ある所にいつもキリスト教を嘲弄して、教會へ來ても不真面目で、牧師を困らせてゐた人がありました。處が或日、牧師の説教の中の一つの聖句が、其の靈魂を刺し通しました。其は約翰傳第三章十六節の「神は其生み給へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり」と云ふ聖句でありました。彼はそれを聞くと數年前に死別れたお母様を思ひ出しました。お母様は生きて居られた頃、幾度も幾度も此聖句を口にせられたのであります。其朝彼の心は此言に依つて剝られたのであります。そして其以來恐れ入つて、信者になりました。

「それ神の言は活きてかつ能あり、兩刀の劍よりも利く生命と魂また節々骨髓まで刺し割ち心の念と意志を察するものなり」(希伯來書第四章十二節)であります

第三、劍が敵を倒すやうに、神様の言葉は惡魔の業を破します。キリスト様

が四十日四十夜荒野に居られた時、惡魔は色々難題を吹きかけてまゐりました。たが、キリスト様は、聖書の句を以て見事に應戦して勝利を得られました。聖書に優る鋭い力ある言は、世界に一つも無いのであります。

南洋に人を喰ふ恐ろしい野蠻島がありました。其島へ宣教師が上陸して聖書を教へて居る中に、島民は惡事を捨て、信者となりました。そして野蠻な習慣は全く捨てられて仕舞ひました。或日一人の商人が年老いた酉長に面會して「何の爲に恁那に島の氣風が變つたのですか。」

と聞きますと、老人は次の様に答へました。

「聖書が此島を恁那に變へたのであります。聖書が罪を打ち破つて、私共を善人にしたのです」

聖書は斯の様に名刀と同様、堅固であり、人の心を刺し貫ぬき、罪を根切りに致します。

も一つ忘れてはならぬ、事は、劍を用ひないで永い間手入れせず棄て、置けば、錆が出来たり役に立たなくなるやうに、聖書をたゞ棚の上へ飾つて置いたり、積讀をしたり、塵埃が上に二三分も溜まるやうになつたらもう駄目です。役に立ちません。指先で表紙の上へホロビと云ふ字が書けるやうでは、其聖書の持主の靈魂も亡んで仕舞ふであります。必要な場合には、斷えず取り出して讀み、又は使はねば寶の持腐れになつて仕舞ひます。少くとも毎日三十分位は此聖靈の劍即ち聖書を取出して、磨く爲に用ひなければ、折角の名刀も思ふやうに役立つて呉れなくなるであります。

イースター

われよみがへり 生命なり
我は復生なり 生命なり
兄弟よ汝等のなげきは 望なき他
人の如くならざらん事を欲ふ

約翰傳第十一章二十五節
帖撒羅尼迦前書第四章十三節

イエス様は十字架に釘けられて後、岩を切開いて造つた墓場へ葬むられました。其の入口には石の戸が固く閉ざれてありました。イエス様の敵はもうこれで大丈夫、イエス様は死んでしまつたと思つて安心いたしました處がそうではなかつた。三日の後マグダラのマリヤといふイエス様の婦弟子が墓所へいつて見ましたら、墓は空虚になつて確に置いてあつた筈のイエス様の屍骸が在りませんでした。西洋にはイースターの日曜日には、澤山の人々が花束を携へて愛する人々の墓を訪れて行く習慣があります。マリヤがイースターの朝イエス様

の墓を訪れて行つた時の心持も其人達の思と似通つてゐたらうと思ひます。あの潔い主の御姿、あの尊い説教、あの愛に充ちた御心、自分のやうな罪深い者をも救ひ給ふたイエス様の御心を再び見る事はできないのであらうか。それに來て見れば墓の戸は開かれて屍はどこかへ取り去られてゐるではありませんか。屹度誰か盗み出したのであらうと思ひながら、マリアは入口に立つて泣いて居りましたが、ふと何げなしに回顧ると、そこに見知らぬ男の人が立つて居りました。これは多分庭守だらうと、さう思つてマリアは二言三言尋ね事を致しました。處が其の方の物を言はれるのを聞いて、それが外の人でない、イエス様である事が分りました。イエス様は死から甦つて、墓から出て、再び生き給ふたのでありました。死に打ち勝つて復活し給ふたのでありました。世に居られた頃「我は復生なり生命なり」と仰せられた様に、誠にイエス様は生命の王でありました。

私達も時々、私達の愛する人々を墓場に見送る事があります。昨日まで共に語り共に打興じた最愛の友が今日は一片の骨となつて冷たく墓の底に横はるとは、何と云ふ事であらう。あの笑顔、あの聲音、最早永久も見ること聴く事も許されないのか知ら。さう云ふ場合に遭遇ふ毎に、私達はたゞ悲しみにくられて、泣くより歎くより、外に道を知らぬのであります。けれどもパウロは私共に云つて呉れました。「兄弟よ汝等の憂戚は望なき他の人の如くならざらん事を欲ふ」と。「イエスを知らない、生命の王を信じない人々はいざ知らず、兄弟よ、イエスを信する兄弟よ、「女起きよ」と一聲の下に死んだヤイロの娘を生きかへらせ給ふたイエスを信する兄弟よ、皆様は他の人の様に絶望しなくてもいいのである。皆様は今別れた皆様の愛する人々に再逢ふ事が不能ではない」とパウロは涙にくれる私共を慰め、勵まして呉れます。イエス様を信する人はイエス様が死んで再び死から起き給ふた其の如く甦へるのであります。

私達が毎晩寝てしまふと其間數時間は全く何も知らずに休むのであります。暫して目が醒めると最早夜が明けて朝になつてゐる。やがて私達は起き上つて又新しい日の仕事に取掛りますが、死ぬのは丁度それと同じだとイエス様は申して居られます。死ぬといふのは暫くの間眠る事なのであります。私達はお母様が其兒を寢床に包んで靜かに休ませますように、死んだ人々を慕ひいふ寢床へ横たへるのであります。やがて凡ての用意が整つた時に、皆様のお父様が皆様を呼び起される様に、イエス様は眠つた方々に「汝起きよ」と仰せられるのであります。

恚う申せば、皆様の中には、神様はどんな風に一度分散になつた身體を再び集め給ふのであらうと、疑ふ人があるかも知れませんが、これは神様のなさる事でありますから、私達は分りません。

私は或人から恚那話を聞いた事があります。或銀細工の職人が美しい銀の

コップを細工して居りました時、一寸した拍子にコップが指の間から沁り落ちて強い酸類の中へ落ち込みました。そして見てゐる間に、溶けて仕舞つて、影も形も無くなつて仕舞ひました。酸が銀のコップを全く食ひ盡したのであります。それを見て職人は直様他の液を流し入れました。すると溶けた銀がもう一度現はれて参りましたから、それを取上げて、其から再び銀のコップを造り上げたそうであります。私達の肉體が消去つた時にも、多分神様は今の話と同じ様に、私達の靈魂に適した肉體を再び與へたまふのに相異ありません。

さうとすれば、私達はどんな種類の肉體を、復活の時に持つのであらうか、今持つてゐるのと似寄つた肉體なのだらうかと尋ねる人があるだらうと思ひます。それについてイエス様は、一粒の麥に譬へて申された事があります。麥粒を地に蒔けば追々芽を出して参ります。そして結ぶ穀は今のと同じものではありませんが、非常に似寄つた穀を生じます。それと同じく復活の際、神様が私

達に與へ給ふ肉體は今のごと同じではないが多分似寄つた、或はもつと優つた榮ある肉體を備へて下さるのであらうと思ひます。此の地球で今持つてゐるやうな肉體は天國で要らないのでありませう。皆様は遊戯の時と。教會へ行く時と、或は他處へ行く時とは着物を違へます。同様に私共の靈魂も天國に行けば違つた着物を着るのであらうと思ひます。着物を其の行く先によつて更へますやうに。イースターの朝イエス様が甦り給ふた事は私共と何の關係もない事ではありませぬ。どうして私達はイースターを祝ふかと云ふに其理由は、イエス様が死から起き上り給ふたと同様に、イエス様を信する私達に死に打ち勝つ道が開けたからであります。イエス様によりまして全世界の人が唯夢見て居りました死からの復活、神の國、永生、死の征服が事實にせられたからであります。イエス様は「我は復活なり生命なり我を信する者は死んでも生くべし」と申して居られます。パウロは私共が死に出會つても「望なき他人の如く絶望せぬ

やうに」と勸めて居ります。イースターの喜ばしい鐘の音を聞く時、私達はイエス様の聖言を深く味つて神様に感謝の祈を捧ぐべきであります。

短篇説教 (4)

アーメン ハレルヤ

すべての民はアーメンと云ふべし、エホバを讃稱へよ(ヘブル語ハレルヤ)
詩篇第百六篇四十八節

舊約聖書の原書はヘブル語で書かれ、新約聖書の原書はギリシア語で書かれました。

其次に、新舊約共、ラテン語に移され、遂に英語を始め殆んど全世界の言語に翻譯されました。其故私たちが日本人は、日本語で神様の聖書を讀むことが可能なのであります。

けれども或數種の言語だけは、**ダビデ王、ソロモン王の御代に、ヘブル人**

がヘブル人の心から發した發音が殘されて居るのであります。其中でもハレルヤと、アーメンについて今日は申し上げませう。一つは、讚美の言葉、一つは祈禱の言葉であります。此二つの言葉は、聖書の何たるかを私たちに教へて呉れます。即ち、聖書は特に讚美と祈禱の書物であります。

ハレルヤとは、エホバを讚稱へよとの義であります。アーメンは、名詞の場合には、忠信、忠實を意味します、形容詞の場合には、確實を、副詞の場合には、まことに、正確に、と云ふ意味を示します。私たちが讚美歌や祈禱の最後に「アーメン」と申します場合には、それだけで一つの祈禱でありまして「げに然り、しかあれかし」の義であります。

昔、ある宣教師が、難破いたしました野蠻人の住んでゐる海濱へと打上げられました。見まはすと、向ふから恐ろしげな未開人が武装いかめしく立向つて來るではありませんか。最早生命は無きものと覺悟して宣教師は、砂濱

に膝居き、天の父を見上げてひたすら祈禱に心を籠めて居りました。而して最後に「アーメン、ハレルヤ」と申しました。

すると何處からか

「アーメン、ハレルヤ」と反響して來るではありませんか。不審に思つて顔を上げると、直ぐ前に立ちはだかつた野蠻人が頻りに「アーメン、ハレルヤ」を繰返して居るのであります。

宣教師は「兄弟よ」と云つて其手を握つて涙に暮れました。其黒人は、既に救はれた信者でありました。

アーメンとハレルヤは世界語であります。誰人の心をも捕へるエスペラント、誰にでも了解される共通語であります。

私たちは、どんな時、どんな場合にも、天父に依頼み（アーメン）イエスを眞實とし（アーメン）聖言を忠實に（アーメン）實行するものでなければなり

ません。

かゝる人々のみ、本當に心の底から

「ハレルヤ！」の叫「エホバを讃稱へよ」の歌聲が自發的に心の泉から湧き溢れて参ります。

「すべての民は、アーメンとなふべし

エホバを讃稱へよ」

舌の力

視よ微火いかに大なる林を燃すを、舌は即ち火なり 雅各書第三章五節六節

今から四十年餘り前、米國はシカゴに世にも恐ろしい大火がありました。其
たの七萬人は家を焼け出され、二萬人は焼殺され、市全体に何億万圓といふ大
損害を受けました。何が原因となつて恁那大火が突發したのでせうか？

小さい一つのカンテラの火、それが原因でありました。一人の男が牛小舎へカ
ンテラを携へて行つて、何氣なく乳を搾つてゐる最中、ごうかしたはずみで上
から落ちて枯草へカンテラの火が燃れ移りました。其の火が遂に未曾有の大火
を引き起したのであります。そして遂に一つのカンテラの火が町を焼きつくし
たのであります。

ある所に二人の兄弟の子供がありました。お父様は其子供等に決して、マツ
チをいぢつてはならないと云ひ聞かせてありました。兄弟の家の裏はすぐ大
な深い山へ續いて居りました。或日二人は山遊びに出かけました。そして「枯
草を集めて火を焚かう」と、平素の父の誠まことに背いて、マツチを取り出して其
邊の枯草に火を點けました。暫くは面白さうに眺めて居りましたが、やがて其
儘二人は家に歸りました。處が其の夜、晝間の疲れでスヤスヤと眠つてゐます
と、忽ちけたまふましい警鐘の音が森に響き渡りました。「火事だ！火事だ！」
火事ですよ」

山火事が起つたのであります。村の人々が總懸りで夜通し消火に骨折つた甲
斐があつて、幸に山火事は朝になつて全く鎮火いたしました。一本何千圓も
する立派な材木はスツカリ焼けてしまひました。一本のマツチが山を焼いて仕
舞ひました。「視よ、微火如何に大なる林を燃すを！」ではありませんか。

ヤコブは其言葉に續いて「舌は火なり」と云つてゐます。マッチの火のやうに小さい舌三寸が、飛んでもない騒動の源となる事がよくあります。或町に向ひ合つて二軒の家がありました。其の家の人々は永い間睨み合つてゐまして、途中で出逢つても會釋一つ致しません。子供達に迄お互に口をきいてはいけなと云ひつけてありました。遂には此兩家の仲の悪い事が其町全体の評判になりました。如何して恁那仲違が起つたのでせう。原因はと云へば、片方の家の奥様が、何の氣なしに云つた悪口からでありました。

「舌は火の如し」と云ふのは此の理由であります。舌の力で大なる悪事が起ると同様に、又舌の力で立派な善事が屢々行はれます。

昔我國へ傳道に來た人でザビエーと云ふ名高いエスイツト派の宣教師があります。ザビエーは「東方の使徒」と呼ばれる程の偉い宗敎家でありましたが、彼がフランスのバリ大學で、まだ信仰を持つてゐなかつた頃、友人にロヨラと云ふ

人がありました。ロヨラは熱心なキリスト信者でありましたから、何とかしてザビエーを信仰に導きたいと思ひ、いつでもザビエーに出會つて話をする時は、必ず最後に「人もし全世界を獲とも其生命を失は、何の益あらんや」と云ふのを常といたしました。始めの中は變な事を云ふ位に思つてゐたのでありませうが、あまり度々云はれたので遂に其言葉がザビエーの心を深く動かし間もなく悔改めて信仰を始める様になつたとの話であります。此の短い聖句がザビエーにとつては、靈魂全体を生れかはらすための聖靈の火の火口となつたのであります。悲しみに沈んで泣いてゐる人に私共が心から語る親切な一言、病の床に患んで此の世を果なんである人に送る短かい聖書の一句、或時にはそれが其人の生涯を一變さすのであります。

監獄にゐたある悪人の心に不圖「神は愛なり」と云ふ一句が浮んだ。それは彼が子供の時分日曜學校の先生から聞いた言葉でありました。此短い一句が永

年ねんの間あひだ悪い事ことばかり行やつてゐた其人そのひとを見違みちがへるやうな人物じんぶつに變かはらせる緒いとこどなつたのでありました。

マツチは赤あかん坊ぼうの指程ゆびほどの大きおほさもありませんが、マツチ一本ほんが随分大たいした事ことを起おこさせます。有益いうべきに用もちふれば、暖爐ストーブに火ひを起おこし部屋へやを暖あため、又は御馳走ごちそうを煮にる火ひをつくる一本ほんのマツチ、其そのマツチが或時あるときには、家いえを燒やき町全体まちぜんたいを灰はいにするのであります。舌したはマツチのやうなものであります。其その用法ようほう如何いかんによつて私わたくし達の語かたる言葉ことばが、或あるは人ひとを幸さいはひし、人ひとを禍わざはひし、或あるは世よの中なかを天國てんごくのやうにし或あるは地獄ぢごくのやうにするのであります。

ラ
ン
プ
物
語

燈臺とうだいを携たづへ入りて其そのランプランプに點火てんくわすべし 出埃及記しゅつあじやつ第四十五章だいじゅうごしょう四節しせつ改譯

今日けふはランプランプの話はなしを致いたしませう。

大昔おほむかしには今いまのやうなランプランプはありませんでした。其時分そのじぶんの人々ひとびとは、木きを乾かわかして、端はしに火ひを點つけて、地面ちめんに突つき立たてて燈明とうめいといたしました。松明たいまつや篝火かとりびが昔むかしの人のランプランプであります。其後そのちカンテラカンテラが發明はつめいされました。蓋さに植物しよくぶつから取とつた油あぶらを入れて、それに燈心とうしんをさして火ひを點つけました。皆様みなさまの中で行燈あんどうを見みたことのない人ひともありせう。今いまでもボンヤリした人ひとの事ことを晝行燈ひるあんどうなど、申ましますが行燈あんどうは晝ひるばかりでなく、夜よるでも随分ずいぶんボンヤリした燈火とうくわでありました。次つぎに出來たのは蠟燭ろうそくであります。夜よるの暗やみを破やぶつてチラチラと輝かがやく蠟燭ろうそくの火ひは一種優美いっしゆゆうびな

ものであります。

石油が米國のペンシルヴァニア州に發見されたのは、極近頃のことです。丁度五十年前のことです。其以來私達が普通ランプと云ふてゐる洋燈が一般に用いられるやうになりました。今日では交通不便な田舎を除いては餘り石油燈などを使ひません。

今日は瓦斯燈、電燈の全盛時代であります。瓦斯燈、電燈の輝く所、夜も尙晝の如しであります。

此次にはどんなランプが發見されるでせうか。屹度今迄のランプより數等優つた光が發見せらるゝに相違ありません。

引照した聖句に神様が人々に「燈明臺を携へ入り其のランプに點火すべし」と申されたこと記してあります。

ローマ市に外から少しも光の這入らぬ教會堂があるさうです。だから内側は

晝中でも眞暗であります。其の教會堂を訪ねる人は誰しも不思議に思つて、夜集會がある時にはどうするつもりだらう、こんなに暗くては？と疑ふのを常とします。もし集會のある晩、時間前に其教會堂に這入りますと、鼻をつまみ、とても分らぬやうな暗さであります。暫くすると集つてくる人々は、手に手に蠟燭を携へて參ります。一本だけの蠟燭ではたゞ薄い光しか放ちませんが、來る人も來る人も何百人と云ふ人が皆蠟燭を持つて集るものですから、やがて教會堂は晝のやうに明るくなります。集まつて來る人が各自に光を持込む事によつて教會堂は光を以て照り輝くに至るのであります。

「汝等は世の光なり」とイエス様が申されました。此の世の中は暗い世の中です。あります。悪いこと、汚れた事が多く行はれてゐます。然し私達が各自、少さい乍らも清い光、義の光を輝かせますならば、間もなく光輝く世界となるであります。天國のことを聖書に「彼處には夜あることなし燈の光と日の光

とを用ふることなし、蓋主なる神彼等を照らし給へばなり」と録されてありま
すが、私達もイエス様から載りただけの光を輝かして、少しなりとも世の中を
明るく仕度と思ひます。皆様の心のランプは煤ぶつてはゐますまいか。消えか
ゝつたやうなランプをいくら集めたつて仕方がありません。もし油が足りなけ
れば神様に祈つて、聖靈の油を豊に注いでもらはなくてははいけません。私達の
光の餘り、灯心の何か塵でも這入つた爲ではないでせうか。悪い友達
虚言、惡戯は丁度燈心に這入つた塵埃のやうなものであります。光を鈍くしま
す。遂には光を消します。輝く爲には、常に油を絶やさないやうに氣を注げ、
燈心をよく掻き立てなければなりません、手入を忘れてゐると、ちぎりに光が曇
つてしひまます。

ある片田舎に街燈の設備のない村があります、それでも夜になると、通り
路が明るく照し出されて、大都會の往來と同じやうに心配せずに歩けます。ど

うしてかど云ふのに村の家々の主婦さんが、夜になると各自の家の窓際にラン
プを置くからであります。それが村中を明るくさせるのであります。私達は、
危ない罪や谷や、惡魔の謀が待伏せしてゐるやうな此世を此儘捨て置きわ
けには參りません。私達は常に私達の持つてゐる光——イエス様に戴く義の光
愛の光を輝かさねばなりません。

昔、シメオンと云ふ信仰の厚い老人が、幼兒のイエス様を抱き上げ、神様を
讚美して、「これ異邦人を照さん光なり、また爾の民イスラエルの榮なり」と申
しました。

其様に神様は、私達が、家庭に於て、學校に於て、私達の行く先々に於て、
暗を照し、人を益する光であらん事を望んで居られます。

童兒の聲を聽き給ふ神

神其兒童の聲を聽き給ふ 創世記第十二章十七節

創世記の二十二章には世にも哀れな物語が載つてゐます。見渡す限り焦けつくやうな沙漠の真中で、二人の旅人が行き悩んでゐる。一人はまだ小さい男子、今一人は其の子供の母であります。食物は無くなり飲む水さへも、見當らず、二人は途方に暮れてゐます。今は只死を待つばかり。それにしても此子供だけはどうかして助けてやりたい、もし命が助からなかつたとしても何處か涼しい木蔭にねかせてやりたいと母親は自分の疲勞も忘れて涼しい場所を探し回りました。幸ひ餘り遠くない所に灌木が茂つてゐるのを見出しました。直様子供を其處へ連れて行き、焼けてくやうな太陽の日影を除けさせました。

さうして置いて、母親は、少しばかり離れた所へ行き、箭が届く位の隔を置いて、子供の方に向いて座りました。我子の苦しむ様を見るのは自分の苦しむよりも、母親にとつては辛い事でありました。さうかど云つて、全く自分の子供の姿を見ないで居るわけにも参りません。どんな事がいつ降り湧いて来るかも分りませんから。

母親は焼けてくやうな沙漠の砂の上に座り込んで、時々我子の姿を窺み見ながら聲を擧げて泣いて居りました。目の前に苦しんでゐる我子を助ける事が出来ないで唯泣くより外、何にも出来ない母親の心の中の辛さはどれ程でありませうか。處が、有難い事には其聲を聽かれた方がありました。「神其兒童の聲を聽き給ふ」神様が子供の聲に耳を傾け給ふたのでありました。

神様は、母親の呼ぶ聲を聽き給ふ前に先づ子供の聲を聽き給ふたこの事でありませう。神様は憫れみ深い方でありませう。母親が先づ自分の事よりも、子供の

事を氣にしたと同様に、神様は子供の聲を先づ聞き入れ給ふたのであります。神様は二人の中のより頼りない者の方の身の上を顧み給ひました。神様が苦しんでゐる母親に同情なさらないからではありません。子供の呼聲の方が母親の聲よりも、より力強く神様に訴へ、より切に神様に響いたからであります。其故に「神其童兒の聲を聞き給ふ」たのであります。

斯の様な憐憫深い、天の父を愛する事を躊躇ふ少年少女が一人でも世の中にあるでせうか。神様は特別に若い皆様を顧み給ふ。若い皆様の心配事や苦みは年老のそれよりも、より強く神様に訴へます。

神様は特別に弱い者を顧み給ひます。私達は今の物語を読む時、一層神様を信するやうに勵まされます。けれども昔、荒野に行き惱んだ子供の聲を聞き給ふた神様はもう今日は私達の聲を聞いて下さらないのであらうか。世の中の萬事は變りまして、人の心と猫の眼は休む間なく變りまして、茲に一人昨日

も今日も、いつまでも變らない方があります。其方は昔童兒の聲を聞き給ふたと同様に今日も私共の叫聲に耳を傾けて下さるのであります。

神様は今日も我等少年少女の聲を聞き給ふと云ふ事を、皆様は忘れてはなりません。皆様が遊戯に夢中になつて居る時、皆様の叫ぶ聲、其聲を神様は聞いて居られる。遊び仲間を呼ぶ皆様の言葉、其言葉を神様は聞いて居られる。親しい友達だけに小さい聲で囁いたあの内密話、其囁きすら神様は聞いて居られる。神様は今日も昔と同じく子供の聲を聞き給ひます。神様は遊戯してゐる子供達の叫びに耳を傾けて居られます。さうとすれば運動場は神様の聖所となります。皆様の眼には見ませんが神様は其運動場の真中に居られるのであります。と云つて運動場で笑つたり愉快に飛び廻つてはならないと云ふのではありません。

昔神様の豫言者が、いづれ来るべき楽しい神様の都の模様を描いて「其邑の

街衢には男の兒、女の兒満ちて街衢に遊び戯むれん（撒加利亞書第八章五節）と申しました。神様は皆様を愛して居給ふ。其故に皆様が云ふべからざる言葉、汚ない言葉、何氣なしに云ふ悪口や蔭口を一々聽いては悲しまれます。又神様の尊い聖名を冗談半分に云ふ様な子供を見通しはなさいませぬ。私達の耳にさへ快く響かぬ卑しい言葉が天に反響する時に、聖い清い神様にはどんなに聞きにくい言葉として響く事でありませうか。

神様は少年少女の聲を聴いておいでになる、だから遊んだり面白く騒いではならぬと云ふのではありません。唯どんな場合にも皆様の唇から出る言葉であつても神様の御胸を痛めるやうな言葉であつてはならぬのであります。

神様は私達が、教室で話す聲も仕事場で語る言葉も、一つ一つ聴き洩らし給ひませぬ。私達が眞實な事柄を堂々と語る場合にも、私達の誤を嘘でもつて糊塗す時にも神様は知つて居られます。神様は、私達が誠を云ふために苦しむ

のを、又宜加減な嘘を云つて其場を濁すのを御存じであります。正直な人にとつて神様が聴いて居られると云ふ事は最大の喜びであります。

神様は少年少女が試煉に出會つて迷ふて居る時に其聲を聴いて居給ふ。「主よ助け給へ！」と祈る聲程、速かに神様の御許に届く叫はあります。

私達の祈る言葉は短いかも分りませぬ。私達は長い長い文章のやうな祈は出来ないかも知れませぬ。然し無くてならぬ物を求むる熱切な祈は常に最も短いのを常とします。私達の心が神様に向つて火のやうに熱する時、私達の感情や思想は短い力ある言葉となつて唇から注ぎ出されます。祈禱の力は、言葉の長短にあるものではありません。其言葉の背後の眞實な熱心な心にあるのであります。私達が堪へ切れぬ試煉に出會つて、神様の御力を仰ぎ望むより外、他に道のない場合に發する短い「主よ、我を助け給へ！」と云ふ祈は必ず神様が聴き給ふ叫であります。其様な場合に捧げる私共の祈は直様答へられてあの沙漠

の中で死にかつてゐた子供の聲を聞いて不思議な助を與へ給ふた様に必ず私達を顧みて、必要な助を與へ給ふに相異ありません。

神様は祈りする子供の聲を決して聴き通し給ひませぬ。言葉がよし無遠慮であらうとも神様は、其正直な心を喜び給ひます。神様は或は祈つた通りに聴き届け給はないでも最も善い様に抜目なく取計ふて私達の其日其日を導いて下さいます。

「神其童兒の聲を聴き給へり」而して沙漠の熱土に死なねばならぬ筈の子供は助かりました。私共も此聖言を常に憶て居りたいと思ひます。

短篇説教 (4)

隠れたる奉公

神虫をそなへたまへり 約章書第四四章七節

神様は、時にその聖旨を爲させるために、思ひもよらぬ突飛なものを御用ひになります。

或時には、其爲に、可驚事業と、力ある奇蹟を表はし給ひます。私たちはさういふ際には兼々豫想して居りますから、餘り吃驚はいたしません。普通私たちは、神様の御業を大事件の中に讀み込む習慣がついてゐますので平凡な事柄の中に表はるゝ神様の御業を見落とし勝であります。たとへば使徒行傳の十六章の物語の獄守のやうに大事件によつて、始めて神様の方へと目が醒める場合は決して少なくありません。

處が舊約聖書の一節に、神様が極めて見栄のせぬ少ぼけなものをを用ひて一人の苦虫を噛み潰したやうな顔をしてゐた男を改心させ給ふた話が出て居ります。その男は、もと神様に不従順でありまして、後免されたのですが今度は、神様が、悔改めた、ある大都會の人々を御免しなされたといふので憤慨してゐたのであります。

而して彼は、日蔭涼しい瓢箪棚の下で、ブツ／＼小言を並べてゐたのであります。神様は、こんな男を、何によつて、改心させ給ふたのでありませうか。

「神虫をそなへたまへり」とあります。大地震ではない、大洪水ではない、大飢饉ではない。

一疋の虫!

彼が樹蔭で呟いてゐる間に、彼の坐つてゐた土の下では、一疋の虫がセツ

セと瓢箪の根を噛み碎いて居りました。そのため翌朝になると、樹は枯れ果て、彼の頭の上には、恐ろしい暑い日光が直射して居りました。

神様は、屢かゝる奇抜な方法を以て人を醒まし給ひます。見ねざる世界で隠れたる地下で、如何に多くのものが神様に御奉公を申し上げて居ることであらう。人類がまだ地球上に生れなかつた太古の頃、地の中では、神様の見ねざる化学の助手が、静かに今日の私たちの文明と密接な關係を有つ石炭を造り出すために、死滅した大森林を溶解してゐました。神様の聖祭と人類の善用のためには、輝やく黄金塊を徐々と作製して居りました。神様の熔礦爐では金剛石が大規模で製出されて居りました。石油は地下のタンクに集注され、貴重な有用金属は、美しい鑛脈を形造しつゝ、ありました。私たちは、神様の可驚べき聖業を廣野や雲影や海洋の中に見出します。けれども神様の隠れたる聖業は數層倍驚くべきであります。もしも地上の萬物に天

父の聖使の手の工を見るならば、地下に忙がはしく働く隠れたる奉公人の功
率を認めなければなりません。一疋の虫、皆さんが嫌悪がる一疋の小虫の大
功蹟を認めることが皆さんにできますか。

土壤を穿ち、地層を砕いて、空氣と慈雨を樹の根に運ばせる途を拓くのは
誰でありませう。地を軟らげて根の上向に便利を圖るのは誰でありませう。瘦
地を沃地に變化するのは誰の仕業でありませう。十中八九までは、かゝる勞
働者を厄介視してゐるでありませう。人に隠れて大なる聖榮を表はしつゝ、勞
働者の上に祝福あれ！一疋の虫が一人の愚人の悔改の動機をつくりました
ら、地球はそれだけ美はしく又肥沃になつたのであります。「神虫をそなへた
まへり」暗黒の中で蠢動しつゝ、仕事をしてゐる盲目の虫、人は輕蔑もしや
う、されど天地の造主は聖業の道具に用ひて居られるのであります。光の中
に歩みながら、天父の聖業に携はるべき楽しい奉仕を忘れ勝な人間は、かゝ

る虫の前に、どんな顔をして對面するつもりなのでありませうか。
今一つ暗示らるゝことは、神の國に於ては、屢々多くの仕事、人に知ら
れないで、人の目より隠れた地下で行はれると云ふことであります。
多くの善き業が、人の目の前で、イエス様のために行はれると同様に、地
上の花園の美はしく飾らるゝために、隠れた處で汗水流す奉公人が少なから
ずあるのを忘れてはなりません。

少年少女諸君！

皆さんに、他の何が可能なくとも、これだけは可能。隠れた處で力持す
る男らしい御奉公だけは「一人に見らるゝために」善事を勵むのも悪いことで
はありますまい。けれども神様の見たまふ處で、爲す奉仕は一段と推奨すべ
き價値を持つて居るのであります。人に見られることを第一に心懸けるのは
パリサイ人の弟子です。

けれども、神様の聖名の故に、人に見られざらんことを第一に望んで善業に骨折る人々は、まことに、イエス様の友人であります。最微ことを忠實に行ふ人には必ず隠れたるに見たまふ天の父が明顯に報ひ給ふであります。

何を祈るべき乎

爾曹信じて祈らば求ふ所ごとく得べし 馬太傳第二十一章二十二節

皆様の中には多分、神様は大人の祈は聽いて下さるけれども、言葉の整はない、餘に子供臭い私達の祈は受け入れて下さらないと考へてゐる方があるかも知りません。それでなくても、先生や牧師さんの立派な祈求は神様の御傍まで届くだらうが、あまりに小さい私達の願は聽いて下さらないだらうと獨斷してゐる方があるだらうと思ひます。然し神様はたゞに、大人の眞の父上であるのみでなく、亦子供の天のお父様でありますから、私達の祈にも勿論耳を傾けて下さるのであります。

イエス様が子供の遊戯を例證に引いてお話をされた事のあるのを知つてゐる

方があるでせう。パプテスマのヨハネの教は、餘り嚴格で窮窟だからとてヨハネにも従はず、それかと思へば、イエス様は罪人や税吏を友として居るから耶蘇教は嫌ひだと云つてキリスト信者にならない人々を責めて、イエス様は市場に群れ遊ぶ子供達が

「我儕笛ふけども爾曹踊す、悲歌をすれども爾曹哭かず」(路加傳第七章三二節)と叫んでゐるのに喩へられました。

イエス様は、子供達が市の立つ町の廣場に群れ集つて遊んでゐるのを屢々見られたことがあつたでせう。ユダヤの郷土の子供達は、よく御嫁入遊と葬式遊を致しました。見ると、一人が先頭になつて蘆笛を愉快げに吹き鳴らすと子供の一隊が足取面白く行進する。先立つ一人が泣く眞似をして叫びながら進むと、後に従ふ子供達は皆、墓場に向ふ時のやうに悄然として悲げに行進する。處が、中々それが工合よく揃はない。大勢の中には拗ねて躍りもしなければ、泣きも

しない子供が出て来る。そんな風に、ヨハネが改悔を勧めても平氣な顔をしてゐるし、イエス様が、我を信せよと申されても憤然してゐる人の、昔も今も少なからずある事をイエス様は御覽になつて、嗟嘆されたのであります。

其昔、幼兒を聖腕に抱き上げて祝福をせられたイエス様、子供達の遊戯にすら、目を注められたイエス様は、今日も同じ様に子供達に同情を注いで居られるのであります。

ですから、皆様が、遊戯について祈つても、又は極めて小さい心配事について求めても、少しも構はないのであります。けれども、あまりに馬鹿げた願や其爲に他人を不仕合にしたり、不愉快にしたりする祈は勿論聞き入れて下さらないのであります。

さうならば、如何な祈求は受け入れ、どんな祈求は答へて下さらないのでせうか。

皆様の中の誰かが汽車の旅をしてゐると致しませう。而して、長い退屈な時間、人形を御友達として送つてゐたが、窓外を眺めやうと首を突き出した拍子に、人形はスルリと腕から抜けて線路へ落つこつたとします。其處でお母様に

「お母様！お母様！！あれ！！人形が落ちました。汽車を止めて拾つて下さい」

と、御願ひしたら、お母様は直様、其通りに、機關手に通じ、機關手は大急ぎで制動機を閉め、全速力を出してゐる汽車は瞬間に進行を止め、車掌は早速人形を拾ひ上げて呉れるでせうか。

否、否、例令涙を流して頼んでも、お母様は聽いて下さらないに相異ありません。窓の上の警報器の紐を一寸引きさへすれば、列車は直ちに進行を止めます。けれども玩具を落したからとて、何百人も乗つてゐる列車を例令數秒間でも止める譯には參りません。

然し若しそれが赤ん坊だつたとしたら、どうでせう。

「お母さん！お母さん！！あれ、赤ん坊が……」

と皆様が云ふか云はない中に、お母様は手早く紐を引かれるであります。列車は瞬間に進行を止めるであります。又恁那場合に、お母さんが列車を止めて、爲に例令一時間だけ次の驛に到着のが遅れたとしても、無暗に立腹するやうな人は多分一人もありません。人形と赤ん坊との間にはこれだけの價値の相異があるのであります。

神様に捧げる私達の祈求でも其道理は同じ事であります。天の父上は、此世の父上母上よりも行き届いた御方でありますから、其御取計に錯誤のあらう筈がありません。出来ることなら、皆様の一つ一つの願を悉皆聽届けてやらうとして居られます。

兎に角、私達が祈禱をする場合には、信仰を以てしてゐるかどうか、祈るだ

け價值があることかどうか、自己第一になつてゐないかどうかを先第一に願ひなければなりません。

應答なき祈禱

汝等求めて猶得ざるは汝等欲の爲に費さんとして妄に求むるが故なり
雅各書第四章三節

神様はいつもいつも私共が祈る通りには聽いて下さりません。もし聽いて下されば却つて私共の爲にならぬ事が起るからです。二三年前米國のニューヨーク市の監獄に大罪を犯した凶人が居りました。其青年を熟く知つてゐる老人の話に「あの男があんな悪い人になつた原因は、あの男の父があまり甘かつたからである。あの男が欲しいと云へば何でも與へたのであつた。若しも少し彼の父に目先が見えたら、あの子供もあんなにならなかつたらう」との事でありました。皆様のお父様やお母様は、或時には、皆様の欲しがるものを、どうしても下さらない事がありませう。もし與へたら皆様の害になるからであります。

神様も同じやうに私共を取扱はれます。もし神様が、孫に甘い御婆さんのやうに、一から十迄、私共の願ふ通祈る物の物を與へて下さつたならどうでせう。私共は最早今時分は亡んでゐたかも知りません。私共はよく、自分ですべき等の事をしないで神様に祈るやうな事があります。學校などで、何か問題を出された場合、よくも考へずに一寸六ヶ敷さうだと、おきに「先生分りません、私には出来ませんから教へて下さい」と弱音を吐く生徒があります。勿論先生にとつては、何でも無い直ぐ解ける問題でありまして、先生はそんな願は聞き届けて下さいません。私が解いてやれば君の爲にならない。だから一度持歸つて自分でやつて御覽」と申されるであります。心も肉體と同様であります。進んで六ヶ敷い問題を解いたり、六ヶ敷い事柄に打つつかるやうでなくては發達致しません。だから先生は今云つたやうな願は聞き入れないで却つて生徒自身で骨折るやうに仕向けられるのであります。自分で出来るやうな事迄他人に頼

むなんて云ふのは弱虫のする事です。皆様が神様に御祈した時、もし其祈が叶へられなかつたら、自分で考へ直して見る必要があります。自分の力で立派に出来るやうな事柄迄一々神様に申上げて神様に御心配をかけてはなりません。皆様が明日は遠足だから是非共晴れた天氣にして下さいと寝る前に熱心に祈つたやうな時、もし次の朝雨垂の音がしてゐるのを聞いたとしたらどうでせう。皆様は屹度失望して仕舞つて、神様はあんなに熱心に祈つても聽いて下さらないのだと思ふであります。然し神様には其御世話をなさる大きな家族を持つて居られるのですから、其大勢の人々の都合のいゝやうになさるなければなりません。田舎の方には澤山の百姓が居て畑を耕したり種を蒔いたりしてゐます。そしてどうぞ穀物のよく實るやうにと御祈をしてゐます。もし神様が皆様の方ばかりの祈に答へて毎

日く雨を降らさないで日ばかり照らされたとしたらどうなるでせう。田畑には水が無くなつて作物は一つも出来なくなります。國中に喰べるものが無くなつて仕舞います。

神様はどんな場合にでも其子供等の事を心配なさらぬ時はありません。もし私共が日本晴にして下さいと祈つたのに雨が降るとしたら、其雨はどれ程多くの恵を田畑や穀物や、果物や、草花に與へてゐるのであるか考へて御覽なさい。昔話に、ある天使が人々から神様に雨乞をして呉れと頼まれたので、いつの日が皆の人々にとつて雨を降らすのに便利だらうかと考へてみました。そこで月曜はどうだらうかと云ふに、此日は洗濯日だから女の人が困るだらう。そんなら火曜日は？丁度商賣人の書入日だから雨が降れば氣の毒だ。水曜日は？百姓が草を刈ると云ふし、木曜は刈つた草を集めるさうだ。金曜も土曜も工合がよくない。そんなら日曜は？、日曜に雨が降れば日曜學校や教會へ行く人が難

儀するだらう、恁那風に考へてみると皆の人が雨の降るのを歓迎して呉れさうな日は一日もありませんでした。そこで天の使は神様の處へ行つて、いつでも神様が好いと御考へになつた日に雨を降らしてやつて下さいと御願ひしたといふ話があります。

人は時を知りませんが、神様は常に尤も善い時と場合を見計らつて萬事を成し給ひます。

私共は時々勝手氣儘な願を神様にさへげる事があります。ある子供が、何か買物をしたいのだけれどお金がないと云ふので「どこかに入用だけのお金が落ちてゐますやうに」とお祈したといふ話があります。これは無邪氣な罪の無い祈のやうに見えますが、實は其子供がお金を拾う爲には誰か他の人が、それだけ失はなければなりませんから、随分氣儘なお祈であります。「誰かのポケットからお金を引出して私のポケットへ入れて下さい」と云ふのとあまり違ひは

ありません。私共の祈が聴かれたら、誰か困るやうな祈をしないやうに氣を注げなければなりません。もしもそんな祈をした所で神様は聴いて下さいません。私共が幾度も祈つても神様が答へて下さらないのは、神様が聴かれないのではなくつて、私共の祈が正しくない為か、それ共善い事を祈る祈でないからであります。

何故動物を愛護すべきか

神共造りたる諸の物を見たまひけるに甚善かりき 創世記第一章三十一節

萬物をお創りになつた神様は、萬物を愛せらるゝ神様であります。神様は人を愛し給ふと同様に其お造りになつた獸を愛し鳥をも愛せらるゝ方であり

ます。ヨブ記にも「鴉の子神にむかひて呼はり、食物なくして徘徊る時鴉に餌を與ふる者は誰ぞや」と云つてあります。(ヨブ記三十八章四十一節)

神様は私共が又動物を愛するやうに望んで居られます。どれ程動物が私共人間の役に立つて呉れるか。先牛と馬の事を考へてみませう。牛は私共に、ミルクを與へて呉れます。バター、チーズ、肉を供して

呉れます。其皮は鞣されて靴となりませす。其他人間に出来ない力業をして呉れます。又馬がどれ程用ひられて居りますか。馬の御蔭で人間はどれ程助かつて居りますか考へて御覽なさい。牛や馬に人間は充分御禮をする必要があるのではありません。人間でないから、お金をやるわけにも、慰勞會をしてやるわけにも参りませんが、親切に痛はつてやる事は出来ませす。牛や馬を虐待するやうな者は、何につけても信用の出来ぬ人物であります。

印度では象が馬のする仕事を皆引受けてやつてゐます。其上馬では出来ぬ藝當まで致します。

印度人のお母様は象に赤ん坊の守をさせる事があります。象は子守なんかはコマリマスなごゝ何處かのお嬢さんのやうに鼻を鳴していやがらないさうであります。

ある宣教師の話に、大きな象が眠つてゐる赤ん坊の守をしてゐたが、蠅が赤

ん坊の傍に飛んで来ると鼻に捲いた小さな木の枝で絶えず追拂ふてゐるのを實見したと申してゐます。其象は大きな蠅や虫が象を齧いたり咬んだりするのを忘れて赤ん坊の守をしてゐたさうであります。

動物は私共に役立つてくれるのみでなく、非常に人間を愛するものであります。其故に私共も愛を以て扱つてやるのが當前であります。

オランダへ旅して、オランダの英雄沈黙ウキリアムと呼ばれたオランダ公の葬られてゐる町を訪ふ人は、ウキリアムの大理石像を必ず見物に参ります。上野公園の西郷隆盛の銅像が犬を連れてゐるやうに、其大理石像の足許には、首を前足の間へ入れた可愛い犬が刻んであります。オランダの首府のヘーグへ行きますと、其處にもウキリアム公が犬を連れてゐる像が立てられてゐます。どうしてウキリアム公には犬が附物となつてゐるか云ふに、十六世紀の頃ウキリアム公の生時其盛に活動してゐた時分、一疋の小犬が大變公を愛して居り

ました。其犬は公の行く處へは必ず平素お供をするのでありました。其後公が殺された時、犬は食物も喉へ通らぬ程悲しんで飢死をしたこの話であります。憊ふ云ふ理由でオランダの人が公の像を造る時には、必ず犬をお供させる事を忘れないのださうであります。若し動物が私共を愛さないならば、それは、私共が動物を痛はつてやらないからであります。私共に動物を愛する愛があれば必ず動物の方でも私共を愛して來ます。

鳥でも同じ事です、可愛がつてやれば、驚く程なつて參ります。一羽の雀でさへ、天の父の許がなければ地に落ちないとイエス様は申されました。即ち神様は、各の鳥を知り又心に懸けて居られるとの事であります。小鳥を無暗に空氣銃で追ひ廻して喜ぶ子供がありますが、神様の御心はそんな無益の殺生にどれ程痛められる事でありませう。

ユダヤ人の傳説にモーセが、舅のエテロの許で羊を飼つてゐた時、ある日、小

羊が一疋姿を隠しました、モーセは大層心配してあちらこちらを尋ねました。やつこの事で探し當てますと、小羊はヒイ／＼苦しうに喘いでゐました。其上、足を痛めて、一步も歩けなくなつて居りました。

モーセは小羊に「お前が逃げたから、私が罰を加へると思つてゐるのか。私はお前が可愛相でならないから探しに來たのだ。

さあ私の肩にお乗り、家迄連れ歸つて上げるから」と申しました。やがて疲れ切つた小羊を肩にして檻へ歸りました。神様は此小羊に對するモーセの親切と同情を御覽になつて「我民イスラエルを率ゐさすに足る人物はあの男だ」と仰せられました。憊うして羊飼のモーセは、神様の命によつて一國民の指導者となつたのだと云ふことであります。

リンコリンが或日友人と共に、イリノイスの或田舎道を馬に騎つて駆けてゐましたが、急に馬を止めて、鞍から飛び下りて、草叢の中をガサガサと探し始

めました。

「何か落し物をしたんですか」と友人は尋ねました。

「イ、エ、今ね巢の中から、一羽の小鳥が墜落したから拾ひ上げて元の巢へ入れてやらうと思つて探してゐるのだ」とリンコリンは答へたさうでありました。英雄に恁那優しい情があります。此心があつてこそ、一國民の指導者ともなれるのであります。

神様の造り、神様の愛し給ふ動物を愛する心のない人は神様の子供ではありません。そんな人は大切な仕事を托される資格を有たない人でありませぬ。

短篇説教 (6)

星辰と慧星

顯悟者は空の光輝の如く……星のごとく輝きて永遠にいたらん

但以理書第十二章三節

尾の長さが八〇〇、〇〇〇、〇〇〇哩!

お話できるのはこれだけ。其他のことは何にも知りませぬ。

何處から来たのだから、何で構成してゐるのだから、何處へ行くのだから、何の爲にあるのだから、一向存じませぬ。私はたゞ、其尾が八億里あるだけ知つてゐますばかり。何と云ふ長い尾でせうね。山鳥の長々しい尾も到底及びませぬでせう。

一體こんな長尾の持主は何ものでありませうか。

彗星であります。

彗星は私たちの宇宙にとつては飛入の御客であります。

その閃々と輝く炎のやうな光輝に、真面目な眞實な糖星どもは顔色を失ひます。

長い裳を引いた光明の女王が、嫣然として大空に出現いたしますと、全世界の注意は彼女に注がれ一切の望遠鏡は彗星へと指向されます。

間もなく女王は姿を隠します。誰一人、其行衛を追及することは可能ません。彼女は視界外に去つたのであります。

けれども、其ために今迄、光を失ふてゐた星たちは、再び鮮かに輝き始めます。沙漠の旅人や海路の船人は其光を仰ぎます。而して正しき路を示されるのであります。

茲に二種の人生の繪圖があります。その一方は燃え立つやうに輝いて居り

ます。而して人々の注意と賞讃を一身に引き付け、静かな生涯や静かな人々を思かなものゝやうに浮き出させてゐます。隠徳や淑徳——たとへば、親切情愛、犠牲、同情——を下らない卑しいものゝやうに描き出させます。これが彗星の生涯であります。今一つの生涯は、人目に立たぬ、誠に見榮むのせぬ生涯ではあります。常に輝き、永遠も光を失ひません。常に一定の場に確立してゐます。皆さんが勘定することもでき、それによつて方角を知り航海することもできます。

これが星の生涯であります。

皆さんは、どちらを選びますか。

思ひ切り輝いてゐるのは見榮のするものです。けれども忠實に輝くことは更に望ましいことでもあります。人々に讃められるのは氣持のいいものです。けれども人々の指導となり磁石となることは更に望ましいことではありません。

んか。

人々を眩惑くらんぱくがらせるのは愉快ゆくわいなことであるかも知れません。けれども人生ひとごのよの沙漠さばくや海原うなばらに踏み迷まよふ人々の道案内みちあんないの星光ひかりとなることは更に選えらぶべきより善よき業かたではありませんか。いづれかに御決定おきまめなさる前に聖書せいしょを開ひらいて神様かみさまの聖旨みこころを伺うかがふ必要ひつたうがあります。

「衆多あほくの人を義たしきに導みちびける者は星ほしの如ごとくなりて永遠とこえんにいたらん」

敵を愛せよ

我われに聽きく所ところの汝等なんぢらに告つげん其その仇あひを愛あいし汝等なんぢらを憎にくむ者ものを善遇よくせよ

路加傳第六章二十七節

我國わがくにに傳つたはつてゐる美談ひだんの多くは忠臣孝子の物語ものがたりでありまして、又其多くは復讐あだうちの談はなしであります。伊賀越仇討いがこほあだうち、忠臣藏其他色々の仇討あだうちが美談ひだんとして傳つたへられて居ゐります。もし日本にっぽんの歴史れきしから仇討物語あだうちものがたりを除のぞいたならば、其大半そのたはんは無なくなつて仕舞しまふであらうと思おもひます。

昔むかしは「人を見たら敵と思へ」とか「男子が一步門の外へ足を踏出したら八人の敵があると思へ」など云つて、武士は互に警めたものでありました。二十世紀の今日こんにちでもまだ「敵を憎め」と云ふ仇討の精神が行はれてゐるのであります。近頃ちかごろの歐洲大戦争は其最も著しい例であります。ドイツ人はイギリス人を

憎みイギリス人はトルコ人を憎み、トルコ人はイタリア人を憎み、イタリア人はアウストリア人を憎み、アウストリア人はロシア人を憎む心に燃わてゐるの
 であります。皆の人が誰かを憎んでゐる。其結果が此度の恐ろしい大戦争であ
 りまして、戦争は私共に汝の敵を憎めと教へるのであります。

處がイエス様は私共に敵を愛すべしと教へ給ふたのであります。イエス様
 はいつても私共に出来ないやうな六ヶ敷い事をお教へなさるのであります。が、
 愛敵の教は其中でも一番實行仕難く思ひます。皆様を愛して下さる皆様の親を
 愛せよと云ふのではありません。友人を愛せよと云ふのではありません。
 皆様を憎む仇敵を愛せよと云ふのであります。自分を憎む憎む人の手を執つて、
 愛を以て「兄弟よ」と云ふ事が皆様に出来ますか。

イエス様は其御弟子を愛し給ふたと同様に敵を愛し給ひました。イエス様は
 先生を敵に賣るやうなイスカリオテのユダさへ愛し給ふたのであります。十字

架に彼を架けた人の爲にさへも尙其祝福を祈り給ひました。そののみならず其
 罪を救ふ爲に死に給ふたのであります。イエス様は私共に敵を愛すべしと告
 げられました。もし世界の人人々が其敵を愛するやうになれば、其時に戦争は地
 上から失せるのであります。

どうして私共は敵を愛すべきであるか。其二三の理由を擧げてみませう。
 第一の理由は、もし私共が敵を愛してやれば、其中に敵は敵で無くなつて
 仕舞つて、今迄憎み合つた人と間もなく親友となれるからであります。

パウロは「汝の仇もし飢なば之に食はせ、若し渴かば、之に飲ませよ。汝かく
 するは熱き炭を敵の頭に積むなり」と申しました。惨い事ではありますが實戰の
 際には、よく敵地に火を附けて敵を敗る事があります。パウロは私共に、も
 し敵に勝たうと思つたら、熱き火を頭に積んでやれと申しました。熱い炭とは
 敵に出来るだけの愛を示し、出来るだけの親切を施す事でありませう。さうすれ

ば、私達の敵は敵でなくなつて仕舞ひます。

北フランス地方で、此間激戦がありました時、ドイツ人とイギリス人が偕に甚く傷ついて倒れました。二人は塹壕の中で相接して横はりました。一人の方は水筒に飲料水を入れて居りましたが、今一人は水を携わてゐませんでした。それを見て、水筒を持った兵士は、渴いて喘いでゐる敵兵の傍へにちり寄つて行つて、僅しか無い水を分けて遣りました。此時、二人は最早、敵ではありませんでした。今や、ドイツ人とイギリス人の胸には、如何な憎悪、怨恨をも溶解するに足る神々しい愛が燃え上つたのであります。敵に打勝つ最確實な方法は、戦ふ事ではありません。敵を善遇してやる事があります。

敵を愛すべき今一つの理由は、私達の心の園を一層美しくするからであります。若し皆様に小さな庭園があるとしたら、皆様は如何なに取扱ひますか。屹度其儘で捨て置かずに、草花や植木を植ゑるでありませう。而して、なるべ

く美しい役に立つものを栽培るでありませう。無益有害な雑草や、有毒植物などは、植ゑ込まないに定つてゐます。それと同様に、イエス様は、私達の心の園へ善い種を——愛と親切と同情——移植る外、決して有害有毒なものを持込んでならぬと申されます。私達は、貴い心の園に、たゞ一本の憎悪と怨恨の草でも、例令敵を憎む心であつても生じさせてはなりません。最後に、敵を愛すべき最大の理由は、これはイエス様の仰せであるからであります。

まだ世界に奴隷賣買の盛に行はれてゐた時分の話、西印度に改悔めてキリスト信者になつた一人の黒人の奴隷がありました。大變に役に立つ男なので、主人に信用されて、其栽培地の見張役に擧げられました。或日、主人が船から上つたばかりの奴隷の購入に出懸ける時のこと、手傳の爲に此信者の奴隷を伴れて行きました。やがて奴隷市場に到着しました。其處には——何と云ふ痛ましい状態で

ありませう——幾百と云ふ人間の商品がズラリと陳列せられて居りました。暫く時見廻つた後、此見張人は、一人の貧しい老耄た老人を見付出して、主人に買取るやうに勧めました。恚那ヨボくの老爺を買つたつて何の役に立たうと、主人は思つたので、唯黙つて笑つて居りました。けれども餘り熱心に頼むものですから、船の持主が

「では、他の奴隷をお購入下さいましたら、其お剩餘として附けて上げませう」と、申出しました。で、主人は、願の通り、其老爺を一緒に買取つて遣りました。

歸る途々も、黒人の見張人は、其貧しい哀れな老爺を親切に世話してゐるのでありました。歸ると、自宅へ老爺を連れて行き、自分の臥床へ、何かと痛はりながら、寝かすのでありました。食事も吟味して調へ、まるで王様をお迎へした様に叮嚀に取扱ひました。餘りの親切に主人も驚き

「其アフリカ人の老爺は、お前の親父なのか？」と尋ねました。

「イ、エ、親父ではありません」

「では、お前の兄弟だらう？」

「イ、エ、兄弟でもありません」

「では、お前の叔父様か、それとも古いお友達なのだらう？」

「イ、エ、私の親類でも、友達でもありません」

「そんなら、どうして、そんなに親切に世話をしてやるのか？」

「彼奴は、私の昔の仇敵です。私を自宅から誘拐して、私を奴隷商人に賣渡したのは、あの老爺です。けれども、私の聖書は申します。「爾の敵を愛せよ」と。又「爾の仇若し飢なば之に食はせ、若し渴かば之に飲せよ」と私は聖書の云ふ通りに行ふて居るのであります」

私達に此奴隷の心が少しでも了解り、然して彼のやうに聖書の教を忠實に實行するやうになりましたら、どれ程、社會は變る事でありませう。朝日の輝く處、夜の暗黒が逃げ去るやうに、愛敵の精神が盛な所には、戦争も無くなり、憎しみも消え、種々の六ヶ敷ゴタゴタは全く影を隠すであります。

汝等の光を耀かせ

人々の前に汝等の光を耀かせ

馬太傳第五章十六節

或所に四十年の間、毎日日光の記録をとつた人がありました。其人は其長い年月の間、一冊の帳面へ、毎日何時間照つたか、何時間曇つたか、何時間降つたか、一々記入したのであります。今日では、太陽の照る時間を、自動的に記録する小さい器械があるさうです。それには地球の廻るに従つて廻るガラスが取付けてあります。ガラスの下には紙片を置くやうになつてゐます。日光が其ガラスを徹して直射すると紙片の焼点に當る部分が焼けて印がつくのであります。毎日毎日此器械で記録を取れば何年たつた後にも、毎日何時間づつ日光が照つたかを知る事が出来るのであります。

「汝等の光を耀かせ！」とありますが、どう云ふ譯でありますか。
 其れは、私共の行く先々へ光明と日光を持つ行けとの事であります。世の中には生れながら快活な人があります。其人と顔を合すと、今迄曇つてゐた心も何となく愉快になり活々させられるのであります。これと反對に常に陰氣な質の人々があります。さう云ふ人が這入つて來れば、今迄日光の輝いてゐた室が何だか急に曇日になつたやうに感じさせるのであります。

イエス様は私共に「汝の光を人々の前に耀かすべし」と申されました。私共各自の持つてゐる光を、他人の爲に、もつと明るくもつと強く私共の行く先々で輝やかすやうに心懸けねばなりません。丁度、今お話した日光照射時間測量器が毎日記録するやうに、イエス様は、私共が毎日何時間光を輝してゐるかをチャンと記録して居られるのであります。

皆様は輝いてゐる時と、曇つてゐる時と、雨を降らす時と、どの時間が一番

長いでせう。

私はバレアナと云ふ少女物語を読みましたが、其にはバレアナと云ふ少女が斷然愛の光を輝してゐた事が面白く書かれてあります。どんな不平家でも、どんな陰氣な人でも、どんな怒りつばい人でも、バレアナの無邪氣な快活な顔から溢れる光に照らされると忽ち人が變つてしまひました。或人は長年の病氣で一日として晴々した日を送つた事がありませんでした。或人は子供を失つて辛い曇つた心を持つて居りました。或人は、冬枯のやうな淋しい心を抱いてロク／＼人と口をもきかずに日を過して居りました。處が其處へバレアナが出て行くと不思議に人々の心が晴れやかになりました。話を交してゐる間に心の曇日は晴天と變るのであります。私共は果してバレアナのやうに行

く先で光を輝かして居るでありませうか。
 ルイズと云ふ少女がありました。二十歳あまりで亡くなりましたが、ルイズは常

に他人に對して雲とならず、太陽となるやう常にたねす心懸けてゐました。其故に彼女に接した人々は皆、何か知ら彼女から益を受けたのでありました。イエス様は、毎日、私共が日々輝かす光を記録して居られるのであります。どうか私共は、いつ迄も鈍い月並の光を輝かすキリスト信者でなく、名前ばかりの日曜學校の出席者でなく、時々レコード破りの光を輝かす者となり度思ひます。

否の一語

汝等是を是とし否を否とすべし恐くば罪に定められん 雅各書第五章十二節
汝等たゞ是々否々云へ此より過ぐるは惡より出づるなり

馬太傳第五章三十七節

皆様はよく笑ひ事に、一息に前關白太政大臣藤原の朝臣何の某と云つてごらんだとか、間違はずに早く「坊主が屏風へ坊主を描いた」と三遍云つてみなさいなどと云つて人を困らせて喜ぶ事があるでせう。中には僕は世界で一番長い六ヶ敷町の名を知つてゐるなど云つて、ロシアの變に長い妙な町名など持出して得意がる人があります。處が茲に私共のよく知つてゐる言葉でそれを云ふのに非常に勇氣が入り、非常に六ヶ敷言葉が一つあります。然も極めて短い言葉なのであります。それはローマ字で書けば、僅にNとOの二つの文字で書ける

ノーと云ふ言葉、即ち否と云ふ言葉であります。

スボルジョンと云ふ名高い牧師の言葉に「ギリシヤ語を學ぶよりもノーと云ふ一つの言葉を學ぶべし」とあります。

どうして若い人が罪に落入るか、悪事に誘はれるかと云へば、多くの事を知つて居り、澤山の學問を致しますけれど、最大切な此の教育を受けないからであります。悪事の誘惑があります時、勇氣を以て立上つて「否、私は其をやらない」と云ひ切る力がないからであります。例令ぞれ程の學者でありましても此一つの短い言葉を云ひ切る事を知つてゐないならば、安心が出来ません。

軍隊が夜營いたします時には、營の周圍に歩哨が警戒致します。暗語を云はなければ、何人も歩哨線を通過する事を許されません。曖昧な様子があれば銃殺されます。

私共にも一つの暗語があります。其言葉を明瞭と云へなければ今一段すぐれた生涯に這入る事を許されません。其は短い一つの言葉ノーの一語であります。

此言葉の必要は殆ど毎日あります。悪友が、悪事をすすむめに來た時、皆様はきつぱり「ノー」と、勇氣を以て云ひ切らなければなりません。尤も世の中には口で「ノー」と云つても、否だか是だか怪しいノーがあります。いつの間にかノーが承諾になつたり致します。

ヤコフは何と云つたか。「汝等の否をして否とせよ」と云つて居るのであります。私共が一度「ノー」と云ひ切つたからには飽迄もノーでなければなりません。

日曜學校や、家で教へられた事に反して悪事に走るやうに誘はれる様な場合私共は斷然とノーの一語を發する事を忘れてはなりません。

昔米國はフライデルフィアの富豪スチーフンシラードに雇はれてゐた一青年がありました。或時シラードから日曜日何か仕事をするやうに命せられま

した。すると其青年は主人の前で「私には出来ません。私はクリスチャンであります。私はお母さんと日曜日には仕事をしないと云ふ約束がしてあります」と申しましたので、主人の命に従はない雇人は置くわけに行かないと、其青年は雇を解かれました。

其後間もなくジラードの許へ或人が来て「私の仕事の大切な役目を任せたいが、誰か當になる青年を御存知ありませんか」と尋ねました。ジラードは答へて「私は一人の青年を知つてゐます。私は其男を、日曜日に働かないと云ふので免職しましたが、其青年は、例令自分の地位を失つても、否の一語を發するのを恐れない青年であります。あの男をお雇ひになれば間違ひはありません」と申しさうであります。否の一語の爲に免職された青年は、其爲に又以前よりも善い地位にありつく事が出来ました。

例令全世界が脅かしても云ふべき場合に否の一語を發する事の出来る人は英

雄であります。ルーテルを歌つた詩に「勇敢なるルーテル否と答へければ、其否に觸れて全歐州は動ざたり」と云ふのがあります。最

或場合には、ノーの一語で以て全世界を動かす事が出来るのであります。最勇敢な人と云ふのは、最戦争の上手な人ではありません。何とか云へばぢきに喧嘩を始める人ではありません。犬でも蛇でも、熊でも怒れば勇敢に争を始めます。最も名高い、最も立派な種類の勇氣は、悪事に誘はれる場合、斷然と否の一語の出せる勇氣であります。否の一語、短かいけれども貴い言葉ではありませんか。

私共は是非共此勇氣を神様に祈つて戴かねばなりません。

短篇説教 (7)

翻譯のできない聖語

タ リ マ ・ グ ミ 馬可傳第五章四十一節
 エ ツ パ タ 馬可傳第七章三十四節
 エリ・エリ・ラマ・サバクタニ? 馬太傳第二十七章四十六節

其自身では何でもない平凡な土地や事物が、ある偉人や親しい友人と何かの縁が生ずると、それが、非常に大切な、興味のある、貴いものと化する経験を私たちは屢々いたします。

鶴が岡は清康潔白な清磨の故に名高く、小田原は農聖金次郎の故に私たちの心に生きて居ります。

大した錢のかよつた品物でもなくとも親友が贈つて呉れたと云ふことが有

難いのであります。古ぼけた一冊の書物を何故そんなに尊重すると申されるか、これは私の愛する者の救はるゝ原因となつた本であるからであります。ある事物や、ある場所を眺める時、私たちは屢々忘れ得ざる人々を回想して故知らぬ物懐かしさに時の經つのを忘れることがあります。

此理由で、あらゆる不愉快をものとせず、多くの人々が、年々歳々。聖書國―イエス様に關係深き國々を訪問いたします。今日の聖書國は荒れ果てた實に殺風景な土地であります。然しながら、イエス様の足跡が、其處を聖地と化したため、全世界から幾萬幾百萬の巡禮者を引き著けて居るのであります。

此等の人々はイエス様の遺跡や遺物を求めて参りますが、それが頗る怪しい物ばかりであります。けれども、今朗讀いたしました三つの言葉、これだけは間違ひのないイエス様の遺物であります。

聖書の他の章節はギリシア語に翻譯せられ、英語に移され、日本語に譯されてゐますから、其意味だけは讀めますが、イエス様の國づからの聖語を其中に讀むことは可能ません。

然しながら、茲に擧げた聖語のみは、福音記者も、あまりに神聖なために外國語に移し放しにするのを恐れて、其儘に書き傳へ、而して其意味を書加へたのでありませう。

イエス様が一少女を死の蔭から呼び起し給ふた時、彼は

「タリタ・クミ」と仰せられました。

(註) 正しくは「タレーサ・クーム」アラミ語の「タルイエサー・クミー」にて「少女よ起きよ」この義なり

此聖語が馬可の心にいつ迄も刻まれて、彼は其まゝ其著書へ傳へたのであります。

また、イエス様は或時、雙の吃者の唇と耳とへ手を觸れて「エツバタ」と申されました。

(註) 正しくは「エスバサクー」にて即ち「開け！」この義なり。

十字架上の七言の一つは

「エリ・エリ・ラマ・サバクタニ？」でありました。

あまりに畏れおほくて一度耳にすれば生涯忘れられない聖語であります。

(註) 正しくは「エロロイー・エロロイー・ラムマー・サバクタニ？」にて「わが神(エロロイー)何故(ラムマー)汝我を棄てたり(セバクタニ)の義なり。參照詩篇第二十二篇一節

此等の言葉は其故にイエス様の聖聲の振動を傳へて居ります。皆さんが此等の聖語を口にする時、皆さんの唇はイエス様の其時の唇と同じ形になるわけであります。

私たちは昔の弟子達とちがって、イエス様の聖聲の音調を耳にすることは

できません。たと此等の翻譯のできない言語を拾ひ出して、かうであつたらうかと推量するのみであります。

然し私たちに、此等の言語が、その充分な意味を以て響くでありますか。「タリタ・クミ」と聞いて、昔のユダヤの少女は死より甦へされました。暗黒より再び光明に移されました。私たちに同じ力をもつて訴へるでありませうか？

「エツバタ」と聞いて、嘗て音聲と楽曲との世界から隔離されて居りました一人の男は、耳を開かれ舌の束縛を解かれました。「エツバタ」と云ふ聖語は私たちに如何な力をもつて響いてゐますか？

イエス様は今も、私たちに聖語を語り給ひます。皆さんの心が利己主義の墓場に死にかゝつてゐる時に、イエス様に祈つてごらん下さい。

「少女よ、我なんちに云ふ、起きよ」と宣ふであります。今や死の床に最

後の挨拶を、愛する人々に交してゐる刹那「タリタクミ！」と宣ふ聲が信者の耳には響いて参ります。響になつて神様の聖語が聴けない時、舌が結ばれて讚美の歌が唱へない時遠慮なくイエス様を見上げてごらん下さい。必ず「聞けよ！」との聖聲が聞けるであります。又堪ね切れぬ苦痛の最中に沈む時「エリ・エリ」の叫の意味が、自づから了つてくるであります。

此だけ申せばどうして此等の言語が譯されないか、其譯が多分皆さんに解つたであらうと思はれます。

神は何故悪魔を滅し給はざる乎

サタンすなはちエホバの前より出で行けり 約百記第一章十二節

昔、イスラエルの人々が、モオセに導かれて、エヂプトから約束の郷土、カナンを指して行く途中、或日無数の毒蛇が住んでゐる谷間へと差懸りました。其處で澤山の人々が、無慘にも蛇の毒に斃れました。(民數紀第二十一章)

往來で楽しさうに一人の少年が遊んでゐる。急に裸に痛苦を感じたかと思ふと、直ぐ腫れ上つて、間もなく死ぬ事があります。或少女が母親の爲に、水を汲まうと泉の傍で屈んだ刹那、急に手頸に刺すやうな痛苦を覺れたかと思ふと、向方の草原を一疋の蛇が、のたくつて行くのを見た。程なく彼女は死なねばならなかつたやうなこともあります。

森の中へ薪材を探りに入る人々、野原へ草を刈りに出る人々の第一に氣をつける事は、蛇であります。斯様ことは、殆ど毎日、あちこちで起る事でありますが此等の毒蛇に咬まれたら、先助かる見込は無いのであります。

で―話は元へ戻りまして―イスラエルの人々が、モオセの許に行き、泣き込みました時、モオセに爲し得た事は唯一つ、神様にお祈する事だけでありました。

神様は、モオセの祈に答へて、銅の蛇を作つて長い桿の尖に結び付け、皆から見ゆるやうに、營所の真中に立てよと仰せられました。如何程深く蛇に咬まれても、此桿の尖にある銅の蛇を仰げば、救はれるとの事でありました。これは神様の爲され方としては、少しく妙に思はれます。如何して、神様は其時毒蛇を悉皆退治して仕舞はれなかつたのでありませうか。それが人々を救ふ一番善いやり方であり、且又近道のやうに考へられますのに。けれども神様はさ

うは、なさらなかつたのであります。毒蛇は其儘生かして置かれました。さうして置いて却つて人々に向つて種々の訓誡を與へ給ふたのであります。

もし皆様が森の中へ分入る時に、蛇が出て来る恐れがありましたら、一足進むにも氣を注げるやうになりませう。即ち蛇のお蔭で皆様が注意深くなるのであります。

神様は、イスラエルの人々に、銅の蛇を見上げるやうに望まれました。銅の蛇を桿の尖に置かれたのは、困る時、苦しむ時、神様を仰ぎ望めとの思召からでありました。恁那話を續けて居りますと、皆様は、蛇とサタンとごんな關係があるのだらうと、疑ふに相違ありません。蛇とサタンとは親類同志であります。聖書には蛇とサタンを同じ者として記してあります。さうして神様は厄介な悪魔を生かしてお置きなされるのだらう。さうして悪魔を形付けてお仕舞ひなさらないのだらう。悪魔が一体何の役に立つのだらう——と皆様は必ず不

思義に思ふであります。

神様は、イスラエルの人々を惱ました毒蛇を生かして置かれたと同じ理由で悪魔——罪の力——を亡さないで生かして置かれるのであります。其事に由つて、神様は、私達に、一層注意深くさせやうと仕向けて居らるゝのであります。

私達の一步み、私達の一言葉、私達の頭の中の思想について、もつともつと氣を氣けるやうに望んで居らるゝのであります。苦しい時の神頼みと申しますが、何か困る事が起らないと、人間はちぎに、父なる神様を忘れやうと致します。けれども人は苦しい事、悲しい事に、出會ふ毎に、父なる神に立歸ります。其御扶助を求めやうになります。神様は、私達を、より善い、より強い神様の子供に、煉り上げる爲に、私達をわざと苦しい面倒な境遇に置き給ふのであります。

神様は時に私達を、悪魔の手の中に、托せ給ふ事があります。昔ヨブと云ふ人は、何の罪もないのに、脊負ひ切れぬ程の激しい患難に出會ひましたが遂に神様を信じて、悪魔の攻撃に打勝つたと云ふ勇ましい物語があります。そんな場合に、私達は、神様の力によつて、悪魔の誘惑に打ち勝てば、以前よりは一段立優つたキリスト信者となれるのであります。

或時、フランスのバスチールに在る大きな監獄へ收容られた一人のフランス人がありました。其男は一日の中、唯僅の時間、それも高い處にある窓から、ほんの少し日光が流れ込む窓に入られたのであります。物音一つ聞ねると云ふでなし、誰一人話相手となる人もないのでありますから、大層落膽して唯悄然と、其日其日を送つて居りましたが、或日のこと、一本の小さな草が窓の石の間から芽を出してゐるのを見付けました。外に何一つ此男の目を慰めるものがありませんから、彼は、日々に延びて行く此一本の草を見守つて居りま

した。而して日と共に其植物を愛する心が深くなつて來るのであります。何と云ふ植物だか、花が咲くのかどうだか、全然分りませんでした。其男は、心の中で思ふ様

「もしあの植物が、醜い草となつたら私は一生出獄の見込がないのだ。だが若し可愛い草花となつたら、私は屹度放免されるに相違ない」と。

或晩、彼は熟く眠つて翌朝不圖、目を覺ますと、得ならぬ芳香が室中に漂ふてゐました。彼は、直様藁床の上から飛び下りました。目の前には、小さな可愛い草花が佳い匂を放ちながら微笑んでゐるではありませんか。これを見て彼は、躍り上る程喜びました。其後間もなく彼は放免せられ、無事に再び我家へ歸る事が許されました。此話を知らない人々は、どうして其人がいつもいつも小さい草花の鉢植を大切さうに机の上に載せてゐるのか、不思議がつたさうでありました。

神様は、私達が果してよく悪魔の誘惑に堪へ切るかどうかを見守つて居られます。私達に臨む種々の苦い出来事に由つて醜い毒草と化するか、或は又牢屋のやうな處に芽を出しても佳い香を放ちつゝ、人を慰め世を祝福する草花と成るかを始終眺めて居られるのであります。

イエスの少年時代

周遊して善事を行へり 使徒行傳第十章三十八節

新約聖書には、大人となられてからのイエス様の傳は詳しく書かれてありますが、少年時代の御様子はあまり記されてありません。だからイエス様の少年時代について特別に氣を注いで學ぶ必要がありません。

イエス様は其少年時代をどんな所で過されたのであらうかと云ふに、イエス様の生ひ立たれたナザレといふ所はほんの小さい貧しい汚ない田舎町でありました。

町通も極めて狭くて、こちらの側の家の窓から手を出せば向の家の窓にある人と握手が出来る位でありました。

もし馬車か駱駝でも通りかれば街道で遊んでゐる子供達は大急ぎで家の中へ駆け込まねばなりません。町には下水もなし、掃除屋も参りませんから、至る所に塵屑が積まれてあつて、實に穢苦しくありました。町筋の綺麗になるのは大雨の降つた後位のものです。

イエス様の御家が又みすばらしい建物でありました。壁に一枚の裝飾畫が掛けてあると云ふではなし、室に家具や調度があると云ふのでありません。臥床の設備も無ければ椅子もありません。夜寝む時には床の上に一寸した粗い毛氈を敷くに過ぎませんでした。

子供達の中には、ぢきに不平を並べたり、愚圖々々云つて親を困らして、あれが無い、これが足らぬと泣く子供がありますが、イエス様の少年時代を考へて御覽なさい。皆様の中誰一人としてイエス様よりも劣つた家に住んでゐる人は無い筈であります。

イエス様はそんなら少年時代にはどんな事をなさつたであらうと云ふに、今日の皆様ができる事と餘り違はなかつたらうと思ひます。きつとナザレの里を走り廻つたり遊戯をしたりなぞなすつたに相違ありません。私共の今日してゐます遊戯の中には何千年の昔から傳つてゐるものもあります。あの隠れん坊のやうな戶外遊戯は、其頃のパレスチナでも行はれてゐたであらうと思ひます。そして多分ナザレの田舎町でイエス様は外の子供達と一緒に、今日皆様が喜んでやる其同じ遊びをなされたのでありませう。

然しイエス様は唯皆と共に遊ばれたのみではありませんでした。イエス様は善事を行ひつゝ周く巡られたのでありました。イエス様は其行かれる先々に於て、其足跡を遺す所々に於て、常に人々をより仕合せに、より楽しくするやうに心懸けて居られました。

昔、いつでもポケットに一ばい橡實を入れて持ち回る英國の海軍大將があり

ました。機さへあれば其椽實を摘み出して、地面に植わて居りました。どうしてそんな事をするのかと人が問へば「私は我國の爲に舟を造らうと思ひまして澤山の樫の木を用意してゐるのであります」と答へたさうであります。斯様に私共の足の向く先々へ、幸福と光明を持ち運んで、幾分なりとも其處を離れる時には善い置土産をして來る事が出來たら、どれほど嬉しい事でありませう。

イエス様は此事を爲し給ふたのです。「此ナザレより出でたるイエスは周遊て善事を行へり」と記してあります。

毎日夕方になると勤め先から瀛車で家へ歸る人がありました。毎日毎日一時間近くも満員の列車の中で立往生をする事はあまり心持のよいものではありません。

けれども此人は其時間を最有益に用ゐました。夕方には人が込み合ふので

立つてゐなければならぬ人が澤山出來ます。其中には、女の人や年老がありました。

其人が考へるやう、私は身体も大きいし力もある、だから多勢が崩れ込んで來る時に一番善い席を取つて置き、疲れてゐる人や氣の毒な人に譲つてやりませうと。

さう云ふ譯で毎夕、此人は誰よりも先へ列車へ乗り込み、いつも善い席を占めました。而して込み合つて來た時分、座席が無くつては堪われないやうな人々を見付けて席を譲つてやりました。

「瀛車の込み合ふのは随分厭なものだが、今では、そんな場合に却つて誰かを御助けする事が出来るから私は嬉しく思ひます」と同じ人が申しました。

ウイリアムベンが書いたのだと云ふ話ですが、私共が常に座右の銘とした
い次の様な言葉があります。

「私は此世を唯一度通るだけである。だから、私に行へる善事があつたら、私が人様に表はせる親切があつたら、それがどのやうな事であらうと私は唯今實行しやう。私はそれを怠つたり、延したりしない。私は此道を二度とは通らないのだから。」

孝行訓

爾の父母を敬まへ
子たる者よ爾すべての事兩親に従ふべし是主の悦び給ふ所なり

出埃及記第二十章十二節
哥羅西書第三章十二節

世の中の、餘りキリスト教を識らない人々の中には、キリスト教は親不孝の教だと思つてゐる人が少なからずあります。日本は元來「孝を百行の基」とした國であるから、そんな親不孝の教を信じたりする子供は、國に忠義なものではない。

「忠臣は孝子の門より出づ」といふから、我國の少年少女が皆、キリスト信者になれば、一旦緩急ある時、義勇公に報する忠義な人が一人も出なくなりはないかと心配してゐる人が無いとも限りません。

けれども、實は、聖書程親孝行を厳しく教へる書物はありませんし、又イエス様程立派な孝子は、世界に少ないのであります。

十誠と云つて昔モオセが、神様から授つた誠は、神様に關する誠五ヶ條人に關する誠五ヶ條との二つの部分に分れてゐますが、其神様に關する誠の第五條に記してあるのが何であるかと云ふのに、此「爾の父母を敬へ」と云ふ言葉であります。其意味は、皆様の父上、母上は此世に於ける神様の代表者である、だから、神様を敬ひ、神様に従ふ心を以て、父上母上を敬へとの事でありませぬ。

皆様は、父上母上を敬つてゐますか。眞に心の底から尊敬してゐますか。

聖書の外の所には、「その父あるひは母を罵る者は殺さるべし」(出埃及記第二十一章十七節)とあります。

よく、子供達の中には、お父様、お母様を敬はないばかりか、何を仰せられ

ても馬鹿にして、少しも云ひ付を聞かない子供がおります。何か戴く時には、飛行器のやうに速かに飛んで参りますが、用事を云ひつかる場合には、蝸牛のやうに、わざとのろくろくする子供がおります。そんな子供は神様もお悦びになりませぬ。いくら皆様が教會へ休まずに來ても、イエス様の話を度々聴いても神様を信じて居つても、もし父上母上を敬はず、そればかりか、いつもいつも御心配ばかり懸けて居るやうであつたらどうせう。

私達は自分一人で大きくなり、自分一人で賢くなつたやうに思つて、大抵両親の御恩を忘れ勝てあります。皆様に三度三度食物を用意し、季節々に應じた着物を着せて下さるのは誰でありますか。皆様が病氣になつて寝んでゐる時、夜の目も寝ずに看病して下さるのは誰でありますか。皆様が日中の疲れで前後も知らず寝入つてゐる時に、一寸咳拂をしたと云つては目を醒し、身体が轉がり出たと云つては、蒲團を懸直して下さるのは誰でありますか。

「既に見る所の兄弟を愛せずして未だ見ざる神を如何で愛せんや」(約翰第壹書第四章廿節)と云ふ言葉が眞實としますならば、神様の代表者である父上母上を敬はない人であつて、どうして神様を敬ふ事が出来ませう。

父母を敬ふとは、唯恐がつてビク／＼して居れと云ふ意味ではありません。出来るだけの孝行をせよとの意味も含まれてゐるのであります。よく世間にはお父様お母様を煙がかり、なるべく其傍へも近寄りぬやうになど心懸ける子供がおりますが、それは敬ふのではなくつて、所謂敬遠主義といつて、敬ふやうに見せかけて實は、迷惑がつてゐる親不孝者のやり方でありませう。

イエス様は孝子の模範であります。父のヨセフに早く先立たれ、まだ二十になるかならぬかに、母のマリアを始め、大勢の兄妹を一手に引き受けねばならなかつたのであります。

それでもイエス様は、汗水流して親譲りの大工仕事に骨折つて、一家を支へ

て行かれたのであります。イエス様が母のマリアをどれ程愛せられたか。あの十字架の上に、何一つ罪を犯したと云ふのではなく其正反對に、周ねく遍歴つて善事をなすつた爲に、惨い刑罰を受けられた時、七つの聖言を發せられたのであります。七つの中の一つは、愛する弟子を指してマリアに「婦よ！これ爾の子なり」また弟子に向つてはマリアを指して

「これ爾の母なり」と云はれた言葉であります。其意味は「私の代りにこれからは、お母様のお世話を頼みますよ」と云ふ事です。私達も、イエス様の此孝心に少しなりとも、あやかる者とならなくてはなりません。十字架上の苦しみの最中にさへ我母の行末を心配し給ふたイエス様の御心これこそ孝子の眞情でありますか。

「父母を敬へ」と云ふ教の次に憶わなければならぬ教は、「父母に従へ」と云ふ聖言であります。「子たる者よ、爾曹すべての事兩親に従ふべし是主の悦び給ふ

所なり」と勸めてあります。これに就いて名高い話があります。

イギリスに十五才になる少年を有つた一人の陸軍士官がありました。其士官の家はロンドンの郊外にあつて、其處から毎日ロンドン市へ通勤して居りました。或朝、自宅を出る前に息子を呼んで

「今日の晝頃ロンドン橋の袂へ来て、お父様を待つておいで！」と云ひ附けました。さう云つて士官は町へ行きました。其日は大變忙がしい日であつたため士官は夜遅く自宅へ歸り著く迄、息子に云ひ附けた事を忘れてゐました。戸口へ迎へた奥様から

「ヘンリーはどうしました」と、聞かれて、急に思ひ出し

「あゝ、さうだ。屹度ロンドン橋で待つて居るに違ひない。晝あそこで俺に逢ふやうに云つて置いたから。」

士官は大急ぎで再び町へ戻りました。橋へ着いたのは早夜半でありました。

然も雨が降つて、寒い晩でありました。

けれどもヘンリーは其處に立つて居りました。お父様との約束通り、一日中橋の袂に待つてゐたのであります。

此お父様の仰せに慙の様に忠實であつた少年は、後にヘンリー・ハヴエロツクと云ふイギリスで名高い軍人になりました。

「私の嘗て學んだ一番善い教は、從順と云ふ事でありました」と、ヘンリーは年老つてから他人に語つたさうであります。

私達は皆、一人も残らず天に在ます父上の孝子であると同しく、亦地に在る兩親の孝子でなくてはなりません。

流矢に射殺されし王の話

茲に一箇の人偶然弓を引きてイスラエルの王の胸當と艸摺の間を射たり

列王紀上第二十二章三十四節

今から二千七百年あまり前、イスラエルにアハブと云ふ王様がありました。或日軍隊に將として、スリア人と戦ふ爲に出かけました。處が、元來アハブ王は卑怯な質であつたので、若し自分が王だと云ふ事が分れば、スリア人が屹度附狙ふだらうと思つたので變装を致しました。それでアハブ王は、戰場へ臨む場合に王達の普通著ける立派な鎧や、飾付の兜をスツカリ脱ぎ捨て、たゞの兵卒の姿に扮しました。恚うして居れば滅多にスリア人に見付かるまいと思つたからでありました。

やがて戦争が始まつた處、案の定、スリア人はイスラエル王アハブを探求め

て、あちらこちら探し廻りましたが、遂に見付かりませんでした。處がスリアの軍勢の中に一人、弓と矢筒を持つた兵卒が何氣なく弓弦を引緊め、絃を當がひ、好加減の方角へ誰を狙うともなくヒューとばかりに放ちました。即ち偶然弓を引いたのでありました。

其矢の行衛は？無名の一兵卒が何心なく放つた其矢は、變装までして逃隠れてゐた王様に命中したのでありました。胸當と艸摺との接目へ矢が飛んで行つて到頭アハブ王を倒したのであります。

スリアの兵卒は、王様を狙つて放つたのではありませんでした。恐らく一生の間、自分の矢が王様を射殺したのだとは知らなかつただらうと思ひます。皆様、よく他所の子供達が

「私はさうしやうと始から思つてゐたのぢやなかつたのです」
と云ふのを聞いた事があります。始には、悪事をやらうと思つたのではな

つた事が、屢々悪い罪をつくるやうな場合の少なくないのは何故でありませうか。

それに就いて恁那話があります。或造船工が忙しく船を造つて居つた時、材木の中に蟲のついた小さな板を發見致しました。そんな板は使つては悪いのでありましたが其職工は

「何に、こんな小さい板一枚位構やしない」

と思つて、船材に使用いたしました。數年の間、船は仕事もありませんでしたが、やがて船側が蟲に喰はれてゐる事が發見されました。

どうかして修繕しやうと色々手をつくして見ましたが、段々甚大くなるばかり遂に或日、航海の最中、見る／＼内に浸水し始めました。船員は驚いて、ポンプで水を汲出すやら、何かと骨を折りましたが、水はドン／＼浸入するばかり今は乗組員の命が危くなりかけましたので、やつとの思で、ポートへ皆、乗

移りました。

たゞ一枚の蟲喰板が、此高價な船を沈める原因となつたのであります。造船工は元より船を沈めるつもりで、其船板を用ゐたのではなかつたのです。スリアの兵卒は、王様を殺さうと思つて矢を放つたのではなかつたのです。然し結果は斯様になつたのであります。

私達が、何心なく爲る小さい事、それが時には、他人を意外に傷つけることがあります。

舌は矢のやうだと、預言者エレミアは申しました。舌は屢々かの兵卒の矢のやうに意外恐ろしいことを仕出かします。

アメリカの或る大きな町に、一人の貧しい少女がりました。彼女の父は數年前に人手にかかり、彼女は、幼さいながら母親と妹弟達の暮し向を一手に支へてゐたのであります。だから中々、綺麗な着物を著ける事など、思もより

ませんでした。或日のことであります。借に働いてゐる同じ店の他の少女達が彼女の見すばらしい扮装を嘲弄ひました。彼女は地團太を踏む程、口惜しく感じました。それが原因で、遂に、ある川に投身をして死んでしまひました。同僚の少女達は勿論彼女を殺さうと思つてそんな言葉を放つたのではありません。然し彼女等の舌は毒矢のやうに、意外にも、人一人を殺すに至つたのであります。

善い言葉も亦、矢のやうであります。一人の有名な牧師がある夏大洋を航海してゐる時のこと、同じ船に一人の検事長が乗込んで居りました。或晩其牧師が検事長の船室の前へ差し懸りますと、丁度聖書を読む聲が洩れて参りました。

「おはいり」

と云はれて、牧師は其室へ這入つて行きました。

「聖書を読んでゐらつしやるのですね、私は大變嬉しく思ひます」

と牧師が申しますと

「ハイ、私は、少くとも一年に一度は聖書を通讀いたします。尤もつい近年迄

此書物に就いては餘り知らなかつたのであります。

或日、一人の少女が私に、「あなたは聖書を通讀なさつた事がありますか」と答

尋ねました。「イ、エ。お前さんは？」と聞くと「勿論通讀いたしました」と答

へたのでした。私は其言葉に思はず考へさせられました。「私は此國の検事長で

はないか、それに我々の國の文明の一切の基礎となつてゐる聖書を一度も通讀

しないとはどうしたことか」と、私は恥かしくなつて、早速、通讀いたしました

たが、其以來は毎年缺さず通讀いたして居ります」と検事長は答へました。

この少女の言葉の矢は、見事検事長の心に命中したのであります。

何とも思はずに爲す一つの小さい事、何とも思はずに放つ何でも無いやうな

言葉、それが或時には、他人を活し、或場合には他人を殺すのであります。皆

様の口より放たる言葉の矢は其いづれでありませうか。

フオルゲット・ミイ・ナツト物語

そのすべての恩恵をわするな勿れ

詩篇第百篇二節

夏の始流の邊や、濕潤のある牧場を訪ねますと、空色の可愛く花弁を有つた花が、淑やかに咲いて居るのを見ます。

フオルゲット・ミイ・ナツトと云ふのが其名であります。昔のギリシヤ人は葉が耳に似てゐるので「ミューズの耳」と呼びました。又此花が光明の表象であるので「ランターン」提灯とも云はれて居ります。フオルゲット・ミイ・ナツトとは「私を忘れなさるな」と云ふ意味です。此草に就いては色々の面白い傳説があります。昔々、神様が地に咲く凡ての花に、一々名稱を御附けなされた時のこと、或花には薔薇、或花には董、或花には菊など、其々名前をお付になりました。

其際、一番お終に神様の前へ進み出したのが此花だつたさうで。他の大勢の花は、各自美しい名を戴いたものですから、嬉しさの餘り、合唱したり、躍つたりして居りましたが、此花は暫時すると

「あら私、どうしませう、折角戴いた名を忘れてしまつたわ」と云つて萎れてしまひました。大勢の御友達は此を聞いて大層氣の毒に思ひましたが、誰一人此花の名稱を憶てゐる者はありませんでした。それで

「仕方がないから、も一度神様に尋ねていらしやいよ」と口々に勧めました。さう云はれて、此花は元氣を出して、再御尋ねに参りました。

すると、神様は直様、可愛い此花に「フォルゲット・ミー・ナット」―私を忘れるな―と優しく仰せられましたと云ふ話。

私達はよく物忘れを致します。用事を忘れまます。手紙の返事を忘れまます。親切な言葉を使ふ筈なのを忘れまます。自分の名前さへ忘れる事があります。――

嘗てある處で機動演習が行はれました際、斥候に出かけた一兵卒が不利な地に陥つてゐる處へ、一人の貴顯が馬に乗って通りかゝられました。勿論突嗟の場合であつた爲でせう。氏名を訊問された時「忘れまました」と云つて其一兵卒は逃出したと云ふ話があります。これはまだしも、がには、お父様やお母様、兄弟や親友の事さへ忘れ果ても、唯自分の事ばかり考へてゐる事があります。然し私達は誰を忘れても唯一人ごんな事があつても、忘れてはならない方があります。それは天の父なる眞の神様であります。天の父上は、あの可愛い少さい花に名付けられたと同じ言葉を以て

「フォルゲット・ミー・ナット―私を忘れなさるな」

と、申して居られます。ウオタールーの大戦争に就いて、可憐い物語が傳へられて居ります。七月頃ウオタールーの古戦場を訪ふ人は、廣い廣い野原一面に無数の忘れな草が咲き

亂れてゐるのを見るさうであります。あの戦争の以前には、其處に此花の一本すら無かつたのださうです。どうして忘れな草が此處を飾るやうになつたかと云ふに、其頃イギリスに一人の若い軍人がありましたが、出征の際、或人からフォルゲット・ミー・ナットの花束を贈られました。軍人は其花束を戦地へ携へて參りました。間もなく軍人は討死を致しましたが、其花束から落ち溢れた種は地に育つて、其以來此花が古戦場に美しい花模様を織り出すやうになつたのだと云ふ語であります。而して

「國の爲に生命を捨てた勇士を、お忘れなさるな」と囁いてゐるやうに見ゆる事の事です。

イエス様の死を記念する聖晩餐は、一つのフォルゲット・ミー・ナットであります。イエス様は、一國の爲ばかりではなく、全世界、全地球上の男女大人子供の爲に、生命を捐て下さつたのであります。

ジョン・ベートンと云ふ後に傳道史上屈指の宣教師となつた一人がりました。ベートンがまだ青年の頃、或所へ四十哩の旅をした事がありました。ベートンの父は六哩の間だけ見送つて行きました。倍いよ／＼別れる事になりましたが、父は非常にベートンを愛して居つたので、其別離の有様は誠に哀れでありました。

「ベートンよ、神様がお前を祝福なさるやうに！お前のお父様の神様は、お前を常に幸し、お前を一切の悪から守つて下さるからね」

と、優しい父は息子に申しました。二人はやがて別れました。暫時歩いた後、ベートンは小高い丘の上に駆け上り、若しや父上は私を目送して居られはしないかと、來し方を回顧つてみました。丁度其時、ベートンの父は堤の上に登つて、我子の行衛を眺めつゝある所でありました。

「私は涙に目を曇らして、お父様の後姿が全く見なくなる迄、見送つたの

であつた。そして再び旅路を急いだが、其以來、どうか神様の扶助によつて、此様な善い父母を悲しませたり其顔に泥を塗るやうな事を仕出かさないやうにと、深く心に誓つたのであります」とベートンが其後日他人に語りました。皆様の中には、未だ聖晚餐に與らない人が多いであります。ベートンが父を慕ふて一時も忘れなかつたやうに、イエス様を憶ゆる事は出来ません。イエス様の私達には、給ふ愛、恵、救、毎日戴く御飯、それ等を通して、フォルゲット・ミー・ナットと云ふ囁が私達に響いて参ります。私を忘れなざるな、と神様は、常に忘れつばい私達を警めて居られます。野を錦のやうに彩る花、谷間に淋しく微笑む花、山の頂を王冠のやうに飾る花を眺める度に、私達は、此等の美しい花を造り給ふた天の父上を、忘れてはなりません。

聖書の文法

なんぢも體にかの黨與なり、汝の國讎なんぢを表せり

馬太傳第二十六章七十三節(改譯)

中學校や女學校などの學生に逢ふとよくこんな話をしてゐるのを聞きます。「何が嫌だつて英文法ほど面倒なものはない。乾燥無味、蠟を噛むが如しぢやありませんか?、英文法ばかりぢやない、日本文法だつて厄介なものだ。殊にあの假名遣なんて男らしくもない、エと云ふ音に對してある時はへ、ある時はエ、あるときはエだとか。蝶々と書かうと思つても、言海でも傍になければ、チヨウカ、テフカ、チャウカ、丁りやしないんだからね。其意味から云つても私達は、早く我國がローマ字を採用しなければ駄目だと思ふ。そして一日も早く假名遣だとかいふ妙な使を何處かへ追出して仕舞ふに限りますね。」つて

實に其通り。私も或程度まではこれに大賛成であります。ある人達は、一生の間、朝から晩迄thatそれは、willであらう、whichさうの、you汝は、me私に、と云ふ風に文法の捕虜になつて、それでもまだ、willとshallの遣ひ分けが不可能で墓に下つて行く人もあるのだから、皆様の中に文法の時間を、齒科醫の手術よりも嫌がる人があつたとしても、決して無理だとは思ひませぬ。それなのに今、私が皆さまに「神様を知るのにも、文法を勉強せねばなりません」

などと云つたら屹度皆様は、

「もし、さうだつたら私達は、もう日曜學校や、教會へ参りません」

と云つて、同盟休校をなさるかも知れませんが、それでも構はずに、私は今、皆様に難解しい聖書の文法の傳授をしやうと思ひます。

尤も、神様を確實に信じてゐる人々の中にも随分、好い加減な文法を振舞は

す人や、錯誤をする人が時々ないとも限りません。あのイエス様の高弟ペテロですら、

「汝の國訛なんぢを表せり——この人はナザレ人イエスと偕にゐたり」

と、他人から見抜かれたのに、憶病にも

「さうです、私はイエス様の弟子の一人です、イエス様をよく知つてゐます」

と答へないで、一寸文法を誤つて

「我はその人を知らず」と答へたことも、あるのですから、私達も、餘程注意しないと、打消の助動詞を用ゐてはならぬ所に打消を誤用する恐があります。

また、「否」と云ふべき筈を「然り」と云つてしまつて後から口惜しがらねばならぬこともあります。

却説、皆様に、御傳授申し上げたい聖書の文法の規則も中々澤山ありますが其中、一等大切な代名詞の用法だけ先御話してみやうと思ひます。

私達か普通、學校で教はる文法の教科書には、次のやうな表が載せてあります。

I	(私か私は)	The 1st person	(第一人稱)
You	(汝か汝は)	The 2nd person	(第二人稱)
He	(彼か彼は)	The 3rd person	(第三人稱)

それで、始めて文法を勉強する時には、誰しも「私」が「第一人稱」、アイ・アム、ザ・ファースト・パーソン……何遍も返して暗誦するのであります。而して、私達は、「私」が第一人稱であることを何よりも好むのであります。其次に来るのが「汝」であります。私達の相手になる人に、私達は、「汝」と云つて呼びかけるのであります。第三に来るのが、「彼」でありまして、誰か當の相手以外の人のことを話題にのぼす時、私達は、「彼」がどうした、かうしたと、云ふのが文法上の慣であります。

ところが茲に奇態な文法の教科書があります。其によると次のやうな表を作らねばならなくなるのであります。

即ち

He	(彼)	The 1st person	(第一人稱)
You	(汝)	The 2nd person	(第二人稱)
I	(私)	The 3rd person	(第三人稱)

恁那ことを云つたら、文法の教師から、屹度、笑はれるに相違ありませんが仕方がありません。事實のことなですから。

此文法書の始の方にルカ傳第十章二十七節といふ見出しがありますが、そこには、

「なんぢ心を盡し、精神を盡し、力を盡し、思を盡して、主たる汝の神を愛すべし」(改釋)